
不良と私

秋元愛羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良と私

【Zコード】

N4627N

【作者名】

秋元愛羅

【あらすじ】

親が勝手に決めた婚約者。それは
だつた？！金持ちなのに庶民的感覚のお嬢様と不良の話。『いやいや、ありえないですから』

死刑宣告

一通の手紙。

それは私の人生を変えた。

何十にも重ねたいつ見ても見苦しい着物。

私の後輩から『がんばってください』そう言われながらやつてくれたマイク。

私には似合わない赤の口紅がそれを語る。

突然やつてきた家からの手紙。

それは死刑宣告されたのも同じ。

“3月11日にて際脇ホテルにて見合いを行う。10時までに正装にて合流”

完全に業務連絡と化した手紙はありえない内容。

見合い？この歳に？

ありえない。いや、思わなかつたわけではない。その可能性は頭の中にあつた。

だが、この学校に在学中はそんなものは来ないと思つていた。

早く見積もつて卒業後、遅くとも大学卒業と踏んでいたのに・・・・・

私は野澤澪。野澤グループの一人娘。

そして元次期後継者。

元の意味は・・・・・・・・・今はいつか。この話は厄介だから。

私は今日、婚約する。

会つたこともない人に。

死刑宣告（後書き）

これはホムペの作品の改正、連載にしたものです。もし、気が向きましたらうちのほうもみてください。

見合戦（一）

私は今となつてはだた野澤家を繁栄させるための駒でしかない。

それはこつも刻んでこる悪魔の言葉。

「靈さん」

「お久しぶりです、お母様」

「早めにござしてたのね、その心構えいこうとだわ」

そんなこと思つてないくせ」。

心中の中ではなんでこんなやつのために時間を割かなければならぬのだ、そつ想つてゐるくせ」。

「あつがとうござまわ」

「うわは霧崎紅葉さん、そして若葉さん。

あなたの婚約者の霧崎庄吾さんのは親よ

相手はショウガツヒというのか。

まあ、忘れるけど。

「はじめまして、野澤澪です」

いつも使つてゐる愛想笑いをする。自慢ではないがこの笑顔が愛想笑いだということに気づいたのは今のところ一人だけだ。

まあ、彼女自身、この笑顔が機械的で好きではないと言つてゐるだけだが。

じつして私は見合いと言つ戦場に向かつた。

見合い（2）

スヌツ

私のお茶を啜る音が反響する。

ここにいるのは私一人。

あの人は会議があると言つて出て行ってしまった。

分かりやすい嘘。

だからこの場には必然的に霧崎家の人間しかいないはずなのだが。

私の婚約者、キリザキショウゴが来ていない、らしい。

おかげで2時間ほど待たされている。

彼らの話によると私の婚約者は現在彼らが所有する別荘で住んでおり、そこから学校に通っているらしい。

それからそこは指定場所とされたホテルから遠いのでここに変わつて貰つたことも。

その話から推測すると婚約者は大学生、しかも交通が不便な所。国立大学だと思つ。

まあ、40超えたおっさんじゃないだけましか。

出来ればこのまま来なければわたし的にバンバンザイなんだが。

ガラッ

突然扉が開いた。

切り上げるのか？ そう期待しつつ扉のほうを向いた。

そして目を疑つた。

そこにいるのは・・・・・・・・・・・完全に不良と呼ばれるで
あるう人物がいた。

見合いで（3）

ああ、彼を見て私は確信した。これが狙いだったのだと。

つーかあいつらも同じ考え方か。なんちゅうめんざへさせることを。

「えつと…………はじめまして、野澤澪です。」

心身共に頑張りますよ!努力致しますのでよろしくお願いします

で、いいのかな?面倒だけどどんな相手だらうとやさんと接しなければならなければならぬから。

だけど一気にひっくり返された、別の意味で。

彼は眉をよせあからさまに嫌な顔をした。

あっれ…………失敗したかなあ。

それじゃあやばくね？私。

内心焦りつつ冷静を装つた。

『当主なる者焦つても平然としている。絶対に焦つた表情をばらすな』

隠居した爺様が言つていた言葉。

誰であるづが冷静であれ。次期後継者として育てられていた頃に身についた教訓。

これらはどうしても抜けないのだ、体に染み付いて。

「お前、中身、最悪だな」

いきなり言われた言葉。

脈絡も主語もない言葉にただただ驚くばかり。

- ・ ただ、今、別の意味での子を思い浮かべているのは何故だらう・・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ?

見合いで（4）

思って出したかった。あの日のこと。

あの日、私は彼女に会つてすげまつて言われた。

『私はあなたが嫌いです』

それは私を変えた出会いだった。

彼の思つていることとは違う意味でのきょとんせもつと彼を怒らせたらしい。

「チッ。やつぱつな。あいつだと思つてやがる。ゼニツモイニツモサリヒテサシゲビ。ゼニツモイニツモウチの会社を取り込もうと必死なんだな。

2時間遅れても向一つ言わざるなんてよつぱしなんだな、お前のヒジ。俺は関係ねえけど。

つーかそのキモい笑顔やめてくんね?」しが胸糞悪くなる。

つこでこの赤い口紅もお世辞にも似合わねえ。

お前は闇垣のおせりやんか

や、やせこ・・・・・・

田の前の彼が言つてゐる言葉が笑えて・・・・・・

「泣いてんのか、お前。

「せせせ。恨むんならお前のお父様とお母様にしな」

も、わ・・・・・・だめ。

「ふつ。はははは」

やばこ、本当に爆笑もの。

完全に「」の人面白いんだだけビ。

今度は彼がきょとんとする番だった。ついでに変な人を見る田はや
めて。

もつと笑つたりやうかい。

見合い（5）

やつと見つけた。

私を私として見てくれる人。

私を野澤の人間ではなく一人の女として見てくれる人。

数分後・・・・・・・・

「あ～～～～笑えた。完全に爆笑モンなんだけど」

「爆笑する場面があるなら言ってくれ。お前完全に壊れてるぞ」

「酷いな。嬉しかったのに」

「どこの部分が」

「愛想笑いを見抜いたところ。

『どんなときも本心を見せるな』って私の家の家訓？みたいなもので、いつも愛想笑いしてたからこれでも私自信があつたんだよ。

だから嬉しかった。

私を見てくれてるみたいで

「あつそ」

「でも二人目なんだけどね」

「二人目かい」

「うん」

見た目は完璧“THE 不良”なのに意外に絡みやすい。

うん、第一の悠理だ。

「で、お前は何のために俺と婚約するんだ？」

突然の真面目な話。

でも、彼自身は嫌そうだ。

「ああ、知らない。」いつもメリットないのに」

「…………知らない？」

そんなはずないだろ。 いらない俺とまで結婚するんだから何があるはずだろ」

「ないよ。野澤財閥はそう簡単につぶれるような会社じゃないし、今のところ不況の景況もないし」

まあ、本当に不況がでたらつぶれる可能性大だけど。

「ならなんで」

「多分、『ごみ処理』

「は？？」

意味分かんない顔をしてるけど、多分そりだと思ひつ。

でも、彼に言ひ必要はない。

彼は関係ない存在だから。

それから沈黙が続いていることに気づいた。

もつすぐ帰らないと。門限に引っかかる。

「私、帰らないと。

えっと、よひしく、ショウゴ君」

「あ、ああ」

私はなにか言いたそうな彼を残して学園へ戻った。

天才と私（1）

昔々、それはそれはすばらしい天才がいました。

私立帝南学園。そこはいわゆる金持ち学校である。

だが他にも有名なスポーツ選手、医者、弁護士などを排出すること
が多いため天才が集まる学校とも呼ばれている。

だが、学園内の詳しいことは外部では知られていない。

ただ学園出身のスポーツ選手が日々に言つ「もつと素晴らしい天才
がいる」しか分からない。

そんな帝南学園に入学した私。

この学園の仕組みはとても面白い。

自分たちの素性は明かさない。明かす時は緊急事態のみ。

中等部は午後8時、高等部は午後10時までの学園の外の外出可能。

初等部は先生の付き添いのみ。

学園内ならばいつでも可能。

イベント事は何かない限り全員参加。

そして“five”。

これは中等部に上がる時先生、顧問、サポーターが決議して決める
“天才の集まり”。

もちろん高等部に上がって頭角を出すものもいるからこの時一緒に
決議される。

“five”的役割は例えるとアイドル。

イベント事の花形を飾つたり、生徒の相談にのつたり。

まあ、天才と呼ばれるだけで面倒」と押し付けられる集団だ。

それよりも中等部、高等部の女子からたまに“姫”と呼ばれる最も厄介なものが有るのは別の話。

これは私が中等部2年のときの話。

私は初めて“天才”と呼ばれる者とあったときの話。

天才と私（1）（後書き）

ここから澪が中学2年の時の話になります。これを話さないと次がややこしくなるので……。

天才と私（2）

回る回る人の運命輪。それは誰かをつなぎ合わせては別れさせる。

この出会いは偶然か必然か。

神のいたずらは「」で始まつたのかもしれない。

それはまだ生暖かい3月の頃。

急に私は理事長室に呼び出された。

「あれ、瀧ちやん？」

「おはよっ、華音ちゃん、優希ちゃん。あとその子は？」

「おはよっ、優希ちゃんの後輩だつて

「要麻由子です」

「ああ、聞いてるよ、日本記録打ち破った子。あなたただつたんだ

「いや、そんなことはない」とややこじらかして、

言葉を返すと、優希ひかるが笑い始めた。

「堅つくるじいのなしだってこでに理事長進行いつか」

「まあそうだね」

そんな話をしたあと目的地へ向かった。

ガツチャ

「おはよー、みんな来たねえ」

「おはよー」おひこさん、「マリちゃん」

佐々木真里菜さん。

この学校の理事長で佐々木グループといつ世界で5本の指にも入る大企業の社長さん。

だけどその正体は誰も付いていないほどの中ンショーンが高てお母さん的存在。

そんな人がテンションが低いなんて何かあることを示している。

「さて、要ちゃんも中学生になったことだし察するとおり4月に“five”の継承式をやります」

やつぱり、とこりべきかなんというか。

さつき言つた通り要麻由子は高飛びで日本新記録を樹立した子。正確には中学生の部で。

で、彼女の先輩、川ノ井優希は幅跳びで大会新記録更新中の子。はじめに私に声をかけた、山野部華音はワンポイントの悪魔と言われるほどの卓球の実力者。

「それと遅いわよ、悠理^{ユウリ}」

えつ

そこにはいたのは要麻由子と同じ年と思われる子。

ついでに私、いや全校生徒全員が知っている女の子がいた。

時田悠理

彼女を知らぬものはいない。

だって何故なら彼女はこの学園でもっとも尊敬されている天才の子供だから。

これが私とその後異様な速さで“姫”という尊敬される値についた天才、時田悠理との出会い。

天才と私（3）

真っ直ぐすぎる彼女の言葉は例えそれが何者であれ「つと壓しない強さ」がある。

ただそれを受け入れるか受け入れないかは私たち次第。

「悠理、さつきの話聞いてた？」

「想像できますから大丈夫です」

「そう、なら私は退出しようかな。これから先一緒にいる仲間だから仲良くな？」

そういうとスキップして出て行つた。

この空氣をじうじうと？

「ま、まあ仲間だし、自己紹介でもしようか」

「必要ないですよ。噂ぐらいは聞いていますから」

そういうと出て行こうとする天才。

“他人は他人、私は私”主義の私は追いかけないけどどうやらこの人は許さないみたいだ。

要ちゃんのほうは彼女を知つてゐるらしく関与しないといふ顔。

「悠理！――明日から付きまといつから」

そう宣言する優希ちゃん。それ、立派なストーカー宣言よ。

「そうだ、嫌つて言つても付きまとつてやるんだから」

便乗する華音ちゃん、楽しそうな玩具見つけたらしい顔しないの。
ばれるわよ。

頭の中で2人の宣言を隅でつつこんでる私はフルに頭を回転させて彼女にどう接しようか考えていた。

確かにその場限りだが6年も付き合う人間。

ある程度話せる関係のほうがいいか。

「 霧ちやんも、 麻由子ちやんもなんか言つたら？」

「>C?」

そう言って視線を下げる要ちゃん。過去に彼女と何か合った感じだ。

私はゆっくりと彼女に近づいた。

「はじめまして。お前は知ってると思うけど、野澤澪です」

そういう私をじっと見つめる、彼女。

そんなに凝視するような場面ではないはずだけど。

それから視線を外さずそのまま彼女は口を開いた。

「私はあなたが嫌いです」

私を含めその場にいた全員が凍りついた瞬間だった。

天才と私（4）

一気にシーンとなつた部屋。彼女の爆弾発言だ。

それにもなんと言つか。
天才だからなかた
だ単に常識がないだけか。いや、後者だ、絶対。

なんなんだ、この子は。

「言いたいことは言つたので失礼します。

あと、ストーカーするのは構いませんが部活の邪魔はしないでください。もうすぐ昇格試験があるので」

本当に言つことは言つて去つて行つた爆弾、いや台風少女。

こうして第一印象は別の意味で害のある天才と位置付けた。

あれから数日後、私はあまり関わらうとしなかつた。

それは彼女の爆弾発言かはたまた白樺の愛想笑いが効かなかつたのが怖いのか。

まあ、どっちにしろ彼女が関わっていることは間違いない。

ついでにストーカー宣言した2人は制御役の要ちゃんも交えて騒いでいるらしい。

優希ちゃん曰わく、少しば世間話を出来るようになったらしい。

「澪先輩、お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様」

弓道の自主練習。

昔は弓道は好きではなかつた。この学校の仕組みでは能力により各スポーツに当てられる。

だけど私の家のように日本文化を重んじる家は大半が日本伝統のスポーツに当てられる。

能力ではなく“家”という理由。それだけで当たられた引導という世界は私にとって苦痛だった。だが、期待を裏切るように体に馴染み実力となつた。

心身共に引導を否定しなくなつたのは去年ぐらいから。

いつもの練習メニューをこなしたら帰るつもりだったが今日はなぜか足が向いてしまつたのだ。

毎日夜遅くまで電気がついてくる体育館。

ドン、ドン

ボールの弾む音。しかも連續的。ということはバスケ部の子か。

そういえば昇格試験あるとか言ってたよね。

もしかしてその練習かな。レギュラー倍率が一番高いのはバスケ部だし。

それにして結構夜遅くまでやつてるよね。

誰かチラシと見て帰ろうつかな。

そう考え開いている扉から中をのぞいた。

「えつ」

その声に反応したのか中にいた人もこっちを向いた。

天才と私（4）（後書き）

もう一話で天才と私編が終わります。

天才と私（5）

何かを守つ抜く為にすべてを投げ出す決意はあなたにはあるか。

私が見たものは・・・・・・・・・・・・・・

「野澤先輩」

あの天才だった。

「」で見なかつた振りでもしようつかと思つたが無理だと判断した。

「」んばんわ、時田ちやん

「変な感じがあるので悠理でかまいません」

「じゃあ、私も澪でいいわ」

多分、つられてだと思つたビートルてしまった。

基本的に私は他人が何言おうと書がなければいいと感じているから

呼び名なんて気にしていなかった。

それから私が最初から居なかつたと思わされるよつて彼女は練習を始めた。

それならさつと帰ればいいのに帰れなかつた。

だつて、彼女が笑つていたから。

「まだ居たんですか」

「結構練習しているのね。私も練習しているけど11時まで遅くやつていなゐわ」

現在11時。ほとんどの子は寝ている時間だ。

「知つてます。3・4年ぐらい前から遅くまで電気が付いていたことは知つてますから」

「・・・・意外。私が遅くまで練習しているのを知つているのはあまりいらないのに」

だいたいみんなが自主練が終わつたぐらいに来て練習してゐるから。知つている人なんてほんとにわずかなのに。

「あ、やつと表情が崩れた」

「……………は？」

『あ、やつと表情が崩れた……………？』

今さつきまで自主練の時間のこと話してましたよね？

お願いだから脈絡を考えてくれさい。

「自分、ずっと不思議に思つてたことがあるんです。なんでそんなにうそ笑いするんですか？しかもいつもいるメンバーの先輩たちにまで」

「……………そ笑いとこつのは愛想笑いのことよね？」

もしかして会う前からばれてた？

「ついでに歩く日本人形みたいで怖いですよ。田に感情がほとんどこもっていないです。要ちゃんみたいに押し殺しているわけでもなく」

あ、歩く日本人形。ついでに要ちゃんが悠理に会つたときの反応理由はこれか。

つて田に感情がこもつていないうつて……………？」

「田に感情がこもつていないうつて……………？」

「簡単ですよ。先輩、将棋の駒を見るみたいに選んでこいつていう意味です。ただ先輩にとつているかいないか関係ないって言ひ田。自分、その田が嫌いです」

確かに、計算した。彼女は自分にとつてどれだけ価値があるか。

もしかして彼女はすべて知っていた。私の考え方も、他人に対する見方も。だから私は嫌われた。

確かに人から見れば最悪な人間だ。

将来こういうことをするとはいえたのプライベートまで駒のよう

に定めているのだから。

本当は彼女が怖かったんじゃなくて知られるのが怖かったのかもしれない。

醜く、弱い自分が知られるのが。

「ねえ、悠理」

「はい？」

「私も優希ちゃん達の仲間入りしてもいいかしら？」

「・・・・・」

今度は彼女が絶句する番だった。

「だつて面白そつなんだもの、あなたが

まだ、怖ことと思ひ部分があると思ひ。

でも彼女なら、“時田悠理”とこつ存在なり信じられる気がする。

心の隅で叫んでくる私がいた。

私を見つけて

転校してきた不良と私（1）

咲き誇った梅を見ながら思い出していた。

あのあと優希ちゃんと一緒に彼女をストーカーした。いや、たとえが悪いので観察したにしておく。

一緒にいることによって微かな表情の変化が読み取ることが出来た。

意外にも彼女は表情豊かだった。

まだ“泣く”という表情は見ていないが笑う、悲しむ、心配する、などの表情を短い期間の中で表してくれた。

ただ、あまりにも微かのため親しくない者には変化が見えないらしい。

そして私と会つてから半年、「姫」という地位につき立田へへへへ

にちくしまでそしてこれからも私達の目標であり、憧れとなつている。

ただ、「姫」となつて数日後に行われた文化祭の時男装して歩いたところあまりにも様になつてしまい「姫」という名ではなく「王子」となつてしまつたのは別の話。

もつすべ高校生になる。

あと3年と言つ短い年月だが婚約者の彼は精神的に疲れることはなさそうだ。

彼が別居を希望するならば希望に沿うだけだが。

ピンボーン

そつ言えば春の桜祭に出すクッキーの種類を考えたい、そつ悠理が言つていたような。

ガチャリと音をたて扉を開けると

「.....」

「.....」

ガチャリ

何か見ていけないものを見たよ!つな

もう一度開け確認すると.....間違いではなさそうだ。

転校してきた不良と私（2）

「これは…………どういふ」と、

完全に引きつっているだろう笑みで彼を見つめる。

彼が入つてからすぐに届いた大きなダンボール箱。すべて彼の荷物らしい。

私の見解と言つかこの流れで言つと……

「いやで暮らす」

ですよね～～～～～～～～

あのお見合いのあと彼のことについて詳しく聞かされた。

霧崎庄吾。

私と同じ年の彼いる地域では名が知れている不良。だが族には入ってはおらず強さは不明。

彼の両親の会社『霧崎コーポレーション』はある時爆発的に売れて

から業績を上げていくヒントである。

会社自体の歴史は長いが大きくなつたのは約20年前ぐらい。

私的にはあまり見込めない会社だと想つがあの親だから仕方がない。

それから私が調べたところ彼には有名私立に通つ弟が居ること。

私と同じく親とは疎遠なことなどが分かつた。

まあ、回想的なものはじめましてひざひざしてお出で
かが先決だと思つ。

最悪の場合、マコちゃんにひざひざしてお出で
おひ。

健次君は嘆くと想つから一週間に3回ぐらい腰枕やんを売れば我慢
してくれるだろひ。

うん、我ながらいい考えだ。

皿皿皿贅しながら、快適生活計画を練つていた。

天才と不良（一）

ピンーポーン

玄関のチャイムが鳴った。多分今度は正真正銘の悠理だらう。まずは彼女に紹介するつもりだつたからまあいいだらう。

・・・・そういうえばその不良がいないような。アハハ・・・・まさか！――――！

急いで玄関のほうに向かった。

まさかの事態だといつことだけは避けてほしいと願つて。

だが案の定起じつていた。

「うー、澪先輩の部屋ですよね？」

「その前にお前誰だ」

まあ当然の反応なんだナビナムとかみな合つたなやつなん……

「悠理、合つてるよ」

「ナハですか。それはほつとしました。それからこれ、なんですか？」

指を指しながら畠の悠理。悠理のこいつは青筋立てますナビ、ズバッサリとしゃうか。

「ソレで立つてゐるのをひいてあがりせりませんね

「エハハハ」

「却下だ」

・・・・・なんか聞こえたよくな。

「あがりたいんですけど」

「畠のただひ、却下だ」

な、何で私の前に居て悠理を追いつかせるんでしようか。

しかもなんか怒つてるし。

なんか嫌な予感がしてきたのは私だけかしら。

天才と不良（2）

玄関と言つ狭い場所で繰り広げられたよつとすの喧嘩を見守る感じとなる私。

もうすぐ春とは言え寒いから閉めてほしいんだけど。

「じゃまです」

先制攻撃は悠理からだつた。

「帰れ。 そつすればいいだろ」

「先輩に用事があつて来るんです。 あなたが帰ればいいでしょう」

「ここは俺の部屋だ、クソガキ」

「ここは澪先輩の部屋です。 強姦魔」

いろんな言葉を覚えさせすぎらだらうか。 頭が少々痛くなつてきた。

今度からは悠理にオブリークトに包むと重いことを覚えたわよ。

田の前に広がる喧嘩を見ながら決意した。

「さて二人ともお互いのことも分かってたけれども、自己紹介しようか

」「はい」

「ちょっときついかなあといつ言葉をかけたと思うがまあいいか。

一人ともおとなしくなったし。

「時田悠理、澪先輩のひとつ下です」

「霧崎庄吾、これの婚約者」

「先輩はこれではありません」

「てめえには関係ねえんだろ」

「うぐう」と互いに効果音を交えて悠理の言葉がとまつた。

確かに悠理論からすると「これは私達の問題とされる。悠理は普通突つ込まない。

むひつとこうようで口を尖らせた後私のほうに向かって抱きついた。

・・・・・抱きついた？！

天才と不良（3）

ゆ、悠理が抱きついた。

今私の中にあるのはそのことだけだ。

そもそもこの子は甘えることがない。

といふか甘え方を知らない。

だから他人と一緒に居ることが多い悠理が・・・・・

か、可愛すぎなんですけど――――――――――――

今これ以上ない幸せに私は嬉しかった。

でも幸せは続かなくて・・・・・・・

バツシン！――！

鈍い音が響いた。

「いつ

」

そして鈍い痛みが襲つた。

といつてもそこまで痛くない。

だが一番痛いのは悠理だ。

もちろん犯人は・・・・・・・・

「悠理大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「そう、よかつた。で、何で叩いたの？」

「別に」

「別に」で済ませられる問題じゃないの」

「どうでもここだわ」

やがてどうでも良くなつて答える姫約者。

せつかへの幸せ壊しあがつて…………

「帰ります」

じまじめの険悪の中動いたのは被害者の悠理だった。

「え？ 別に悠理は帰らなくとも」

「いえ、お邪魔しました」

そういうて玄関に向かう。彼女を止めるよつないひとはいから
じこで私も何も言わないでおく。

ただお見送りはする。

今回の不祥事はあいつのせいだけ姫約者と言つ立場になつた以上
私にも責任があることになるからだ。

無言で歩く廊下ではため息が漏れそうだ。

「先輩お見送りありがとついでまわ」

「ハハ。」めんね、悠理。痛かつたでしょハハ。」

「いのべりこ平氣ですか」

「本当? 痛れたらすぐには保健室行きなよ?」

「分かりました」

と言いつつも多少の痛みは気にしない子だから明日見てやばかったらさすがにいひ。

そう、心に留めておく。

「先輩、 あの人面白いですね」

聞き流していた悠理の言葉の真意も聞かず私は自分の世界に入っていた。

天才と不良（4）

バツターンっと扉が閉まった。

わい、あいつを帰らすか。

私の幸せを壊した恨み、味わってくれるや。

私は怒ると今までにないくらい笑顔になるらしい。

要ぢゃんいわく『フーラックスマイル』

「帰ったか？」

結構あからさまなのか私が怒つて居ることで仮が付いたらしい。いや氣づかなかつたら困るが。

「ええ、帰ったわ」

今からあなたも帰つてもういつナビ。 いつももこめて。

「あ、せつて荷物でも」

「その必要ないわよ

「は？」

「最初は要ぢやんと部屋変わつてもうりつてもうりぬつかなつと思つたんだけどね。健一君も外部から転校してきたし。だけど、もういいよね？」

「え」

「出でつてくれる？」

「うう、俺の部屋」

「私の部屋。お前に拒否権はない」

有無も言わせないとこう押しが効いたのか彼は無言で出て行つた。

・・・・・・・・・・・・・意外にあっけなかつたわね。

手でも出でつくるのかと構えてたけど。

あ～あ、華音ひやんなら楽しいの！」

本当に出て行くとは思っていなかつた彼の姿を思いながら廊下を見ていた。

不良と愉快な仲間達（一）

「二、怖え」

あいつ、ただもんじやねえぞ。まあ、はなっから知つてたことだけ
ど。

でも、あれはやばかつた。

不良の勘と言つか、本能と言つか。

自分の体が警告を出していた。

・・・・・・・・・そう感じている俺は霧澤庄吾。

同居予定だった婚約者に追い出された男。

別にあの女に言われたからではない。

ただ危険がしただけであったのとガキと女は殴らない主義だからだ。

まあそれは「こと」として「ことば」だ。

あの部屋から飛び出してきたのは「こと」として「これからどうしようか」と言ひ問題もある。

あの女があそこまで怒つた理由も見当が付いてない。

だけどこいつのことも氣にしてほしいものだ。

たとえあいつらがカレカノといつ関係でもあっても。

・・・・・・・・・それって一種俺に対するあてつけだよね。

親からの命令を達成する前に俺がやめそつだ。

「はあ

こうなった元凶の女、野澤澪のことを知ったのはあの見合の一ヶ月前。

久しぶりに本館に行つたときだった。

「彼女とお見合をして彼女からすべてのお金を取り戻すよつて仕組みなさい。」

そのぐらこのことなら役に立たないあなたにでもやれるでしょう。

でも失敗したらそのまま帰つてこないで。

一家の恥だわ」

実の親とは考えられない言葉を俺に浴びせる母親。

父親のまつまつ女のところでも書つてんだだらけ。

だがこれが何年も続いているせいかなんとも思わないくなつたのだ。

「母さん、俺がお見合したいよ」

「せうしたいのは山々なんだけど、あの家には弟が居るのよ。
でもあなたなりの女よつもつといい女が見つかるわ」

彼女が本当に聞いていたら起るだらつて言葉をあべざへじ。

まあどうでもいいかとまづかっておいたり後日じでこた詳しこじ。

見た瞬間俺は悟つた。

「こつも俺と違つ異次元のニンゲン。」

ばんばんと書き連ねて いる優勝と言つ数々。

何もないと言つ俺とは違つ。

だが、会つてみたら。

「アハハハハハハ、笑える・・・・・・・・

目の前に居る女はだたの女に変わりはなかつた。

それからこの学校、帝楠学園に入学させられ今に至るところわけだ。
俺のほかにも外部入学者がいるらしいが関係ない。

俺は独り。今も、過去も、これからも。

不良と愉快な仲間達（2）

『お、こたいら食堂みたいになといふてひいた。

と云つかよく見てみると、いつ通つても学校に行くためには何いふを通りないうこなになつてゐるやうだ。

まあ、そいつのほうが効率的といいからな。

やつ黙つてこるとなると、ひまつてひまつが。

「ウチだ。

「なにやつてんだよ」

「食べてゐるのです」

見れば分かる。

「あなたのせいで台無じじゃないですか」

そういう口ぶりはすぐだと話し始めた。

「桜祭に出すクッキーを試食してもうおつと行ったのにあなたのせいでその話すら出来なかつたし、

帰つてみたら数個誰かに食べられてたし。散々ですよ。

嫉妬するのはかまいませんが被害を作らないでください」

ちよつと待て。こいつは何を話している。

前半のほうはなんとなく分かつた。

ただ後半は何を言つてるんだ。

確かにあの女とは婚約者となつた。

だたそれは紙の上の話。実際はただの他人だ。

なのになんで嫉妬と言つ葉が出てくるんだ。

もしかするとこいつは政略結婚という話は聞いていないのか？

「知つてますよ

「わあ

「こ、こいつ人の心が読めるのか？

「馬鹿言わないでください。口に出てましたよ

「や、そつか」

なんだ、そういうことか。

「・・・・・氣づいてないんですか？」

判断するような顔を向けるコウリになんだか嫌な気持ちになった。

不良と愉快な仲間達（3）

それからユウリはべらべらとこの学校のことにについて話し始めた。
まあ生徒手帳以外のこと聞くのに一番いい方法は生徒だから気にならないが。

人通り聞いてこの学校は本当に違う学校だということに今更ながら知った。

まず、“five”の必要性から聞きたい。

天才をまとめたグループの名前。どこの宗教だ。

まとめる必要性があるのか。

ついでの話、あの女、ユウリ、カナメマユコ、あと俺と入れ違いに出て行つた2人で今の“five”だったらしい。

意味が分からん。

まあ子供の教育に熱を入れていることはいいことだと思つが。

いろいろと話を聞いているとき学校側の廊下から声が聞こえた。

「麻由子~~~~」

「死ね」

なんか騒がしそうな2人が来たようだ。

これに関してはユウリも頭を抱えている素振りを見せた。

不良と愉快な仲間達（3）（後書き）

やつと出でた、うるわこ一人。名前ばかりの登場ですみませんでした。

不良と愉快な仲間達（4）

要麻由子、夏木健次。

この2人の第一印象はバカカッフルだと思つ。

そう言わざる終えない。

「霧澤庄吾。野澤凌の婚約者だ」

「ああ、例の凌先輩の婚約者」

「意外に普通だ」

お前らの言葉にびっくりだよ。意外に普通つて。

「イツら不良を見たことないのか？

…………… そう言えばここは寮生活だったな。

まあ、そんなことはどうでもいい。

この状態はなんだ。

このふたりが来たとたん人が集まってきた。

特に女子。

聞き耳立ててると・・・・・・・・・

「誰、あれ？」

「新入生じゃないかな？」

「でも“姫”がいる」

「もしかして知り合い？」

「さあ」

“姫”？

なんだそりや。

こそこの話を聞いたのか要が夏木に何かを促すようにしている。

そして・・・・・

「悠理、まず、澪先輩のところいかね？」

大騒ぎになつてるみたいだし」

「いのままだと話してへんなよ

そう、提案してきた。

「あ、そつじょつか

おい、まで。

俺、今戻ったら殺されるんだけど

ぐわりに必死の思いで願った俺だった。

不良と愉快な仲間達（5）

現在、このカップルの部屋に居る。

俺の必死の視線に気づいてくれたユウリはあいつにメールして俺と喧嘩（？）していることを知つてこの部屋へと移動した。

つくりはぼぼ一緒に。

ただ家具の位置などが違つだけ。

「LDKについてそつたキッチンでお茶を用意している要が俺に話しかけた。

「どうか何で喧嘩したんですか？あの澪先輩が自分から無駄な喧嘩をするなんて相当ですよ」

後輩に“あの”をつけられてるってどんだけ平和主義なんだ、あのお嬢様は。

「多分、叩いた事だと思つ」

それは分かっている。でも俺にも訳がある。

「澪先輩を叩いた?！」

「いや、じこつ」

誰が好きで女を叩くか。女と子供を叩く奴は嫌いなんだ。

「・・・悠理、からかったの?」

探るよつな目を向けながら話す夏木。

「うそ、楽しそうだつたから」

「は?」

おい、待て。じこつじこつとだ。

「先輩が怒った理由をじこつと説明します」

無表情だがじこつか楽しそうに話すコウツを見る。

「よく、名前を見ても間違えられるんですけど、女ですよ」

・・・・・。

「ついでに女を叩いたのも理由のひとつですが、自分、一応バスケットのヒースなんで腫れたらどうするのっていうのもあったと思いますよ」

俺はとんでもない間違えをしたらしい。

不良と愉快な仲間達（6）

俺はこの世で馬鹿な人間かもしれない。

知つてたけど。

でも、女と男を間違えるなんて最低だ。

あの後俺は放心状態に陥つた。

でもどこかで冷静な俺がいたから完璧に放心状態だったわけではない。

あのカッフルが氣を使って慰めてくれたことも分かつている。

あの時の俺があの女のことを好きという発言の意味も分かつた。

だが、本気でお前紛らわしい。

時田悠理。

名前も男っぽいこいつは正真正銘の女だつた。

一応去年までは髪は長かつたらしい。

それをばっかり切つたとたん髪が伸びるのが遅くなつたらしい。

ついでに服は上の兄貴達のお下がりらしい。

たまに器用な2番田の兄^がが作った服を送つてくらひしが着る^はは
ないらしい。

そして俺はもうろん悠理に謝つた。

間違えていたこととたたいたことを。

まあだましてたから^がとこづひじで許しをもらひえたが。

問題はあの女だ。

俺が謝つたと言つて部屋に入れさせてくれるだらうか?

いや、ないだらう。

でも荷物は部屋にある。

あけるかあけまいか・・・・・・・・・・

ドアノブにかけたとたんガツチャッと開いた。

開いた?!

ドンドン

音を忍ばせていこるつもつだつたがそんなの関係ない。

あの女意外に馬鹿だ。

リビングにつながる扉を開けると叫んだ。

「おこ……」

案の定女は夕食の準備をしていたらしい。

「な、なに?」

「なんでドアに鍵がかかってないんだよ。

お前、誰かが入ってきた時どう対処するつもつなんだよ。

今の時間帯は人が起きているからいいが深夜とかに入られたらひとりまりもねえぞ。

お前が思つてる以上に男の力は強いし恐怖で声が出ないこともあるんだからな

「えっと、まずお帰り」

・・・・・・・・・・・・

「それからこの学校で私を襲おうとする人間もいないし、庄吾が入つてこられないと思って」

自分で鏡見ろ、鏡。

その姿容がブスなんだ。その辺の女よりも倍以上綺麗だぞ。

・・・・・・・・・・・・

「あ、結婚するのに霧崎君じゃおかしいし、どうせならって思つて呼び捨てにしてみたけど嫌だった？」

「嫌というか・・・・・・・・・・・・

嫌われてるから名前すら呼ばないかと思つてた。

「あ、私のことまだ呼んだってかまわないから」

「いや、そういうわけには」

「ああ、文句につかむしれない」終理で言つてへ

「だか、」

「でもその前に、飯が冷めちゃう。早く食べようか」

「ああ、もう。人の話を聞け……」

「澪一、」

「ん? 何

この時初めて彼女の名を呼んだ。

この時俺は想像もしていなかっただろう。

ただ漠然と生きて生きた俺がたった一つのものを守りたいと思つなんて。

過去をそむけ続けてきた俺が向き合ひ口が来るなんて。

不良と新学期

4月

校庭に咲き誇つた桜は新入生を歓迎し、進学したことを祝つている
ようだ。

「あ、つたま痛え」

「徹夜するからだよ」

本日入学式兼課題テスト

貰つのが遅かつた俺は徹夜して完成させた。

言つておひづ。

ここの頭の良さはハンパない。

完全にこんなのでたか？つていつ世界だった。一応、これでも勉強
してた方だが。

もちろん、テストなんて惨敗だ。

「多分、赤点はないと思つし滑り込み入学したからある程度見逃してくれると思つけど…………

酷いよ、これ

メモ代わりとして書いた解答をみながら言つ邊。

へーへー頭いい奴にはかないませんよ。

実際、課題の9割を教えて貰つて感謝しているから言えないが。

「濬先輩」

「あ、悠理たち」

声をした先を見ると場違いな奴ら3人。

といふか入つていいいのか？

普通、いかんだろ。しかももうすぐ昼休み終わるし。

「テスト、どうでした？」

てめえら一回ぶん殴つていいいか？

「…………恋人届け？」

「そんなんあつたねえ」

なんの届けだ。婚姻届けの仲間か。

話の中身を簡単に言つと「ゴタゴタ防止策らしい。

まあ、子供が出来ました～～～って言われたら大問題だからな。

「要らないでしょ」

「確かに要らないな」

紙の上の婚約者ではあるが事実上の恋人ではない。

そんな雰囲気になることはない気がする。

いや、ならない。

ズキンッ

なんだこれ。気のせいいか?

変な痛みに違和感を覚える。

「つまらない

「そうですよーーー」

中坊三人組の抗議の声を聞きながらこの痛みの元凶を考えていた。

不良との通の手紙

「は」

「だから……」

「はああああああああ」

5円。

入学式から1ヶ月。

成り行きもなく澪の口から出た言葉が俺に衝撃を与えた。

「……じゃないですか。澪先輩のおばちゃん家の和菓子、ものすいくおこしいですよ」

「いや、やつこつわけじやないだり悠理」

「うそ、お婆様が喜ぶ言葉だけど」

「うそお婆様が喜ぶ言葉か。」

心ひつひみながらじこなつた成り行きを整理する。

事の始まりは一通の手紙からだった。

澪宛てのきれいな便箋の手紙で送り主は野澤桐恵。

澪の祖母からだった。

その内容はあいつらが決めた婚約者、要するに俺を連れて「ゴールデンウイークに泊まりに来い」と言つもの。

ぜって
嫌だ。

俺に対する嫌がらせか？

「じゃあ、2人の家に行けばいいじゃないですか」
だから、そういう問題じゃねえって。

「…………でも庄吾の家、行つてみたいなあ

……澪まで乗るな。

こうして、澪の祖母の家、俺の家（一家の別荘）に一泊一日泊まる
ことになった。

「お土産、期待しています」

「お前、ぜりてえ楽しんでるだろ」

不良と謹の（祖父の）家（1）

「ゴールデンウイーク一畠目。」

俺は初めて今年の「ゴールデンウイーク」が5畠もあることを呪つた。

「ぜつてえ俺、場違いだろ」

「え、大丈夫だよ」

お前がよくても俺はよくないの。

でかい日本家屋の屋敷の前にして俺は重いため息を吐いた。

「お婆様、お久しぶり」

「澪、お久しぶりね」

なんとも品のよさうなまおさんが出でてきた。

多分、雰囲気はあのすれ違った澪の母さんよつもこの田の前にいる

婆さんのほつが似ている。

「で、この方が」

「うそ、庄吾だよ」

「はじめまして、霧崎庄吾です」

「こつと優雅な笑みで俺に微笑んだ。

「はじめまして。澪の祖母の野澤桐恵です。

ふふ、そう硬くならなくてもいいのよ」

「あ、はい」

硬くなるなつていつもなつかやんだよーーー。

もう帰りたい。俺には完全に合わない。

まだあの学校のほつが慣れる気がするのー。

「で、あなたはどうするの？」

そう言つて後の壁から爺さんが。

“あなた”って言つてるからこの人の夫で遼の祖父に当たるんだよな。

「あいつらが決めたもんなんぞ俺は認めん」

まあそうですよね。

もともとはあなたのものなんですから。

いや、代々の野澤一族のもんか。

「うへん。でもですねえ。彼は関係ないでしょ

「それでもじや。

そこの若造。今回は客人として認めるが親族としての入室は認めん
からな」

えつと、俺はどうこう反応を…………

「若造、返事……」

「はこ……」

何で俺はいつなつてゐることでしうつか。

早く明日になれ！――――――

不良と澪の（祖父母の）家（2）

「でね、悠理が……」

「やう、悠理ちゃんが」

俺、いる意味最初からないですか？

話す人間もいなくて澪の祖夫母家を散策中。

普通はしないんだけど、あまりにも暇だ。

ついでに久しぶりの再会を邪魔しちゃいけないだろ。

するといばたばたつと走つてくる小学生。

・・・誰だ？

「お兄ちゃん誰？」

「え、あ、俺？」

「それ以外誰がいるの？」

まあそりゃだよな。周りこは誰もいない感じがする。

「霧崎庄吾。庄吾でいい」

「近藤豊……おばあちやん達に会ってきましたんだけどいらないの」

「おばあ、いやん? もしかして桐恵さん?」

「うん……」

澪の……従弟らへんか?

近藤つて言つてるし。

「おこ、餓鬼。誰に許可なく入った」

「あ……じこやん」

「お前をわしの孫とは認めどりこ」

え……じこやん」とだ。

孫なのにかわいくないのか?

いや、普通、自分の孫だったらかわいいもんだ。

「うるせーんだよ、あなた」

この間だと聞えた後も、豊と桐恵もんがいた。

「あ、澪おねえちゃん」

「豊、お久しぶり。元気にしてた?」

「うん、がんばってお勉強してるよ」

「やつ

はへ、やつこいつじだ。

豊は野澤ではなく近藤を名乗つてたぞ。

しかもこのこととは豊を認めないと何も言つてこない。

もしかしてこの家も俺の家よりもいたがるつてことか?

そういえば澪は弟がこの理由で次期後継者を降りられたんだつけ。

まったくわからない。

なんだか俺は踏み込んでいい領域に踏み込んでしまったようだ。

不良と澪の（祖父の）家（3）

「」あんね、豊の周り、二三つの頼める歳の人いないから

「庄吾、もつと……」

「それはいいから、豊、降りろ。俺は限界だ」

「ええっ！？ わたし乗ったばかりじゃん

「何回乗つてあがる……？」

俺は豊の遊び道具となっていた。

もしかして「」のところだけ姉弟ともに似てねえ？

完全に人使い荒いことか。

それからおいしい料理（3時に和菓子が出て来たがかなりおいしかった。うん、悠理の言つたことに少しほうなずけた）を食べ、澪は

豊を寝かしつけに行つた。

現在俺は一人。

なぜ豊一人なのかといふと澪の現両親も認められていないく豊だけでも認められないと私に回つてしまつかららしい。

俺の親もそうだがこいつの親もいろいろと大変そうだな。そう思う。

別に澪でもいいと思うが。

こいつ何気に天才だし。

「それにしても、なんだかんだ言つて俺の位置すゞことになつてない？」

布団がしかれている。

うん、ベットじゃないのは想像出来たけど・・・・・・

「並べられてるとは思わなかつた」

しかも隙間もなく。

これを見た澪も苦笑いを溢していた。

現在10時。豊が駄々をこねて一緒に歩いて行ったのは9時。

一緒に寝ちまつたのか？

・・・・・別に澪と一緒に寝ることを期待してたわけじゃなくて暗いから心配というか、なんと言つか。

ああ、もうこいだろ。俺の馬鹿！－

「夜風に当たってこよ」

誰もいないのに俺はつぶやいた。

澪の庭は教科書に載っているような日本庭園のようだ。

少しはなれたところには桐恵さん専用のビニールハウスがあり、そこで育てるのが難しい花とかも育てているらしい。

簡単に言えば落ち着くことだ。

俺に家は芝生や、木はあるが花はそこまでないから結構殺風景だ。

少し離れた花壇に行けば別だが俺にはそんな趣味はない。

「おい、若造何しておる

「へ、あの」

なんでこんなときにこの人に出会うんだ。

出来ればようやく緊張しなくなつた桐恵さんの方がよかつた。

不良と澪の（祖父の）家（4）

えっと緊急事態です。

一刻も早くここから退出する方法を考え出したいです。

「ふん、若造にしてはこの庭のすばらしが分かるのか」

「すばらしだとか……」

落ち着くから来ただけなんだけど。

澪の祖父、源次郎さんは涼んでいる俺を見つけそのまま去つて行くのかと思こやそのまま隣に座つた。

で、現在じつじつここから離れるか模索中。

初めから俺はいい印象じゃなかつたみたいだし何か言わると思つて怖い。

・・・・俺は何を言わることを怖がってるんだ？

家？俺？それとも・・・・・

「お前さんとこも大変そつじやな、霧崎庄吾よ」

「え？」

は、初めて名前呼ばれたよな。

「実の両親とは10歳のときから別居し、小、中ともに親代わりとしてきたのは使用人だったそうだな」

・・・・なんでそれを。

「詳しく述べるとそれから両親に会つたのは遠と会つ見合いの前以外ないとのこと」

「それがどうしたんですか」

自分でもびっくりするほど低い声が出た。

「庄吾よ、霧崎家の駒をやめる勇気はあるか」

は？この人は何を言った。

駒をやめる勇気はあるか？

普通、澪の婚約者やめりとか自分が家帰れとかだろ。

なんで・・・・・・・・・・

源次郎をはめゆつへじこへひきかへいた。

「境遇はお前がことと澪はよつまとい。

ただあの子の境遇はわしたけの判断の誤りかうつせ。

だからもひづ判断を誤つてないな

「なり普通は」

「最後まで聞け若造。

だがお前さんの境遇を知つてお前さんだけは誤むれわんの
だ。

じゅじり残り短い老いぼれ当主の最後の仕事として片付けたいと思つ。

じゅがいいでお前さんこ澪の婚約者を辞めてしまったのならば助け
にへい。

「なりびつかぬか」

「…………俺自身も行動をする、ですか？」

「もちろん澪も協力を依頼する。きっと力になるだろ？」「

「澪にも…………ですか」

「あの子は野澤家の歴史の中で最も繁栄した時代のできる経営者
の技術を持っているからな」

ズキッとした。何故か。分かつてことなの。

俺は…………澪が、あこつと違つて落ちこぼれとこひことなん
て分かつてゐるの。」

不良と澪の（祖父の）家（5）

「お爺様」

「澪、こんな時間に何しておる」

「何つて豊を寝かしてただけだけビ」

「はああの餓鬼なんぞ使用人に任せとけばよかん」

「私の弟にそんなど言わないでください」

「俺は認めてしまひんからな」

「はーはー」

話に夢中になつて気づかなかつたが澪が戻ってきたよつだ。

「で、聞いておったのか、澪

「あ・・・ちよつとね」

もしかして少し前からいたのか。

・・・・・・俺の過去も聞いていたのか？

「すぐに資料を送る。作戦完了は三年後かな」

「三年後・・・・だいたい卒業する辺り」

「あせらんでもええ。これはひとつずつゆっくり確實にやりなさい。

特に庄司、ねまえさんのほな」

「はい」

もしかしたら俺は今日一日でいい人たちにめぐらされたのかもしない。

「氣づいたらもう口付が変わってたんだな

「そうだね。豊と久しぶりに会つたから話し込んでてなかなか寝てくれなかつたんだよね」

「そうなのか」

「うん。最後は文化祭かな」

ゆっくりと歩きながら俺と澪は話していた。

いつもならセカンドを置いていくのになぜか今だけは小幅をあわせて歩いていたいと思つていいの自分がいる。

いや、正確にはこれから寝てしまうのが惜しいくらい。

「明日は一回帰つてそれから庄吾の家だね」

「ああ、一応連絡してあるから大丈夫のはずだけど」

澪を気にってくれるか心配だ。

竹井とか俺の家で長年働いているから人の隠れた本性暴くの得意だしな。

そう思つてると部屋に着いたようだ。

こつもよつよつとやつたような気がしたのは気のせいか？

「庄吾」

「どうした

「頑張るから」

一瞬何をやつと思ったがすぐこのことだと思い

「ああ

そつけないような返事をした。

でも澪はうれしそうに笑つて一步先に部屋へ入つた。

一時帰宅と天才

あの一人が帰ってきたのは毎過ぎだつた。

どうも先輩の弟、義をつけるのかどうかは判断しにくいあの少年と話していらっしゃい。

しょ「うがないことだけでも、あまりあの弟が好きでない。

いや可哀想という感情しか出でこないのもあるけども。

先輩が先輩でない時期はとつても見ていて痛々しかった。

何も思わない、何も映らない、まるで日本人形のような存在。

私がそのことを指摘してからはそうでもなくなつたけれど。

時々、人に見せないとこりでやる冷たい目は誰もどりする」ともできなかつた。

でも今は・・・・・・・・・・・

「悠理、お婆様がねこれ」

「こんなにたくさん……」

「よひこんでたよ」

そう私の好きな笑みを見せる先輩。

ふわっとしてこいつらまで嬉しさを感じさせると、つまら笑みは本当に好きだ。

「重てえ」

「お疲れ、庄吾」

「これは俺に対する嫌がらせか」

「だつて」

「お願ひだから豊を遊ばせた後はやめてくれ」

「女の子にこんな重たい荷物持たせるの？」

「それは・・・・・・」

見た目の反して女、子供を大切に扱うこの人にとってはその行為は考えられないものである。

なんとかこいつらのためなら死ねるって言つアクション映画み

たいな主人公。

まあ実際私の周りにも子供のため（特に恵まれない、複雑な家庭事情がある子供）に人生捧げてますって言う人がいるから何も言わないんだけど。

あの人の場合、度が酷いんだよね。

たとえ馬鹿馬鹿しく思える行為ばかりするあいつのせいだとしても。

・・・・・話がずれた。

今は楽しんでいる先輩をどう止めるかだ。

「豊喜んでたし結果オーライって言つもんだけよ

「喜んでたけどさあ

このブラコンめつと聞こえたのは無視しようか。

「あ、悠理」

「はい」

「庄吾の家から帰つてきたら話しあるからいい？」

「はい」

そういうとふふっと笑いながら庄吾先輩と一緒に部屋へと戻つていった。

先輩、今どんな顔しているか分かりますか？

ふと見ると冷たい目をした人形のような表情が、人を判別する氷のような視線がまったく違うものになつていてるんですよ。

どう表せばいいのか分からぬけれど。

たとえるなら健次が要ちゃんにだけ見せる表情と、気取つてている奴が優菜を見る慈しむような視線と同じなんですよ。

そして庄吾先輩も。

ただ一人とも気づいていない。

出会い方は間違つてているけれども今はただ彼らに幸福が訪れるように努力するだけだ。

私と不良の家（一）

「庄吾の家は洋風なのね」

「まあな」

無事庄吾の家に到着した。

海が近くにある「こことやこの家は現在はあの親の別荘となつて
いる事など」を庄吾から聞いた。

ただの興味本位。

たつたそれだけのことなのにわくわくとするのはやつぱり他人の家
だからだろうか。

基本洋風の家なんかに入ったことは少ない。

寮生活をしているためかまづそつそつ他人の家に上がることなどな
いからだ。

もつちよつとおじとやかにしないとなあ。

「お帰りなさいませ、庄吾坊ちやま。

よつこいりつしゃいました、野澤澪様」

扉の向こうに待っていたのは数人の生のメイドさんと一人の年配の人。

歳は40代後半。

こここの取締役のようだ。

「ただいま」

「お邪魔します」

そつ音つて上がる前にできぱきと仕事をしているメイドさんたち。

なんか慣れない。

部屋を案内してもらつて客間に入らせてもらつた。

一気に静かになる空間。

客間なのか装飾品がかなり豪華だ。

ただ現在の私にとっては結構憂鬱なもの。

基本質素な生活をしている。

可愛いものは好きだけど派手なものは嫌いだから。

『女の割にはしゃれっぽっしだるみな』

私の部屋に入ったときの庄吾の反応。

女の子の部屋に入ったがある発言を聞いてむかついたのを覚えている。

だからあからりとしつこはもてなしなのだらうけど、けは落ち着かない。

しうがないか。もともと洋風の家なんだし。

豪華な装飾に彩られた部屋をもう一度見るとため息をつくのであった。

私と不良の家（2）

現在お庭を散策中。

前には庄吾が居る。

お昼までには時間があるのでお庭を散策してくださいって竹井さんが。

あの人、客人しかも女の人のツボを分かつてる。

だって客室を通るとさすと庭のほう見てたの分かつてたみたいだし。

色とりどりの花が咲いている。

配色もきれいだし結構手間暇かけていることが目に見える。

誰がやつてるんだろう。後で聞いてみよ。

「澪は？」

「ん？」

「親と離れてても寂しくはないのか」

後姿しか見えない庄吾の背中はどこか儂さが感じられる。

「うさん、感じたことはないよ。みんなが居るし先生たちも結構遅くまで居るから話相手してくれるし」

それしあの家にとつてもう私は部外者だから。

花を見る振りをしながら自虐的に笑ってしまう。

初めはいやいやだったあの場所がいつの間にか救われる場所になるなんて小さじけの私はそんなこと思わなかつただろう。

いや思ひはずなかつたんだ。

あんな事故が起きるなんて誰も予想しなかつたんだから。

「澪、どうした」

「え?」

い、いつの間に私の隣に居たの。

「かぶれたのか? それともなんかあつたのか?」

「ど、どうしたの。急に」

「お前、泣いてるんだぞ」

えつ。

驚きつつも頬を触る。冷たい水滴がついたことが感じられた。

私、泣いてたの？

「大丈夫か？」

心配そうに見つめる彼がなんだかおかしくて。

「大丈夫、目にごみが入ったみたいだから」

見え透いた嘘をついた。

ただあまりにも見え透いた嘘だったのがいけなかつたのか。

「帰るぞ」

「え」

「いいから帰るぞ」

そう言つてずるずると屋敷のほうへ連れてかれた。

もう、心配しそぎだてば。

私と不良の家（3）

あの後泣いている私を見たメイドさんたちが一二手に分かれて、私を心配して部屋でいろいろ（お茶とか）してくれて一緒に居てくれた人たちと庄吾を攻める人たちになつた。

庄吾は何も悪くないんだけどなあ。

ちょっと悪い」としたみたい。

「お加減はどうですか？」

トントン

軽くドアを叩かれた後入ってきたのは竹井さんだつた。

「大丈夫です。みなさん心配しすぎですよ。

田にじみが入つただけなのに」

「いらっしゃって下さつたお客様第一として働いてますので」

なんか変な言い草。

見ただけで分かる。

「Jリで働いている全員が庄吾第一と思つてゐる。

「竹井さんはJリのナイトみたいですね」

笑つて半分冗談で言つてみた。

「まあ、そうですね。Jリを守るの私の使命ですから。

澪様は澪様だけのナイトがいらっしゃいますか？」

まさかこんな風に返されるとは思つてなかつた。

私はむしろあの場所では・・・・・・

「私がナイトなの。あの学園のたつた5人しか居ないナイトのうちの一人。

あ、いや、姫が居るから4人か」

ふふふと笑つて答えると答えが違うのか一瞬ゆがんだ表情を見せた。

「そりではなくてですね・・・・・・

差し当たりのない言葉を捜してゐるのか苦笑いを浮かべている。

もしかして私のナイトって彼氏のこと？

「それし私、全然モテないんですよ？」

バレンタインも後輩たちからもらつてますし

そのことを言つと驚いた表情を見せた。

そういうえば庄吾もこのことを言つと驚いてたつけ。

何で驚くのかなあ。

私、結構容姿は平凡なのに。

トントン

控え目に叩かれた音で分かる。

庄吾だ。

「俺だけど入つてもいいか？」

「うん、いいよ」

キーッとゆづくつと扉が開き庄吾が中に入ってきた。

「あ、竹井居たのか」

「すぐに退出いたします。」

澪様、お食事ができましたらお呼びいたします

「ありがとうございます」

一礼すると出て行つてしまつた。

「あ、のさ。落ち着いたか?」

「大丈夫。ここの人たち、いい人ばかりね。

偽つた心配なんて見えなかつたもの」

「まあ澪のこと気に入つたみたいだしな」

「ほんと?...それなら嬉しいな」

お茶のおいしい淹れ方ほんの少し教えて貰つたけどすゞく分かりやすかつたし、まだお花の育て方聞いてないんだよね。

お婆様は温厚でしか育てないから分からぬし。

ここだと気楽に話せる人がいっぱい居るみたいだからたくさん話し

たいなあ。

勝手にここの侵略（？）計画に花を咲かせている私だった。

「澪、自分の世界に行かないでくれ」

私と不良の家（4）

夜、俺は自分の部屋で星を見ている。実際は昔の事をしていのだけれど。

トントン

「竹井か？」

「はい、セウディアモニマス」

そういうと音も立てず入ってきた。

相変わらず物音を立てず静かに入つてこれるよな。

「澪様はお部屋で使用人どもと話してあります」

「澪りし」

笑つて答えると複雑そうな顔をした。

「澪様は何を思つているのか分かりません。気をつけなさいませ」

「ああ、まあ分からぬな。

でも澪は悪こやつじゃなこと

ただ少しも恥じることないあるたび、やの言葉は飲み込んでおく。

だけど竹井は複雑そうな顔のまま。

「それと、澪様に自分自身がどれだけお綺麗か理解されるよりお努めぐだれ。

彼女の場合は口で説明してもお世辞と解釈されてしまひでしょ」

確かに鍵をかけなかつた事件からあれこれ過ごしてきたが全く自覚がないことは分かつた。

一回あいつに相談したが無理だつた。むしろ遊ばれた。

『庄ちゃんが毎日綺麗とか言えれば自覚します』

完全に解決策じゃない。俺に毎日こんなのが並ぶと思つていいのか?

健次じやあるまいし俺は言えつての。

数々の類似事件を思い出しため息をついていたとまたドアから物音がした。

「澪様でいりますね」

「え？」

竹井の言葉にびっくりしながらもあいかから声を待つ。

そして

「私だけ入っていい？」

澪の声がした。

エスパーになつたのか？

「入られますか？」

「え、ああ」

竹井はドアを開ける。

もちろんただけで澪が見える。

「あれ竹井さん。もしかしてお話中だった？」

「いいえ、今終わつたところです」

すぐ退出いたしますので」「やつへつ

そのまま澪を通すとバタンと閉めて行つた。

「「」めん、なんか邪魔しちやつた

そばにあつたソファーに座るとシュンとした表情を見せた。

「いや、ほんとだ大丈夫だから。

それよりさ俺、澪に部屋教えたっけ？」

一瞬思ったことを口に出した。

「え？ うう。玲美さんが行つて来てくださいつて案内してくれたの」

「へ、へえ」

あいつらか・・・・・・・・

「意外とシンプルなんだね」

部屋を見渡して言ひ澪。

ここに入った人間は両手に数え切れるほどしか居ない。

特に女となるとほとんど居ない。

だからなのか恥ずかしい。

「庄吾の部屋、こつも汚いの？」

「…………入ったことあったの？」

「うそ、いつも入ってるよ。あれ気がいてなかつた？」

朝、起きて起きあわせ

やつねえば起きあらへと経つて起きあらへるね。

笑いながら話す漆を見て凍りついた。

うん。帰ったら掃除しよう。絶対しよう。

新しい事実を知つて決意を固めたのであつた。

私と不良の家（5）

それから学園に帰ることになった。

ものすごいへ涙に対する見送りが手厚かった。

すみません、ここは主人俺ですよね？

「こんなにもうれしいとは思わなかつた

きやあきやあ喜びを表す涙。

珍しく俺の歳相応の反応を示していく。

まあそんな反応されるのなら夏休みとかに行きますか？

「今度来たら紅茶の葉の名前とかを教える約束したの」

ふふ楽しみだなあと漏らす涙に悪いがやつぱつさつきの件は削除することに決めた。

俺を知るために行くならいいが今度行つたら完全に使用人たちと遊

ぶに違いない。

俺すゞく暇なんだけど。

女子だけに俺が入れるわけ無いだろ。

はあつとため息をつきながら外を見るとモリモリモリモリ着きついだ。

「あつがとうございました」

丁寧に礼をいい降りた後去っていく車。

ここからは地位も財産も関係ないただの生徒だ。

そつ思つて堂々と歩いていたのに・・・・・・・

なんでいい居やがる。

名門中の名門に行ったので休みなんてほとんど無い。

たとえ休みだらうと平日だらうと将来のために勉強してるはずなの

に。

「やあ、お久しぶり。兄さん」

なんでここにが居やがるんだ。

不良と弟

最初つからおかしかったんだ。

俺に対して何もしなかったのは、

母親も、こいつも。

なあ、行かないでくれ。

「へえ、湊中なの」

「はい、来年は黒沼高校へ行くつもりなんです。

あそこには名門大学の進学率がいいですから」

ここがやつてくるとは思わなかつた。

霧崎和真。正真正銘の俺の弟。

そしてあいつらの会社の次期社長。

多分澪のことを見に来ただと思つが。

まさか「」今まで演技するとは思わなかつた。

「今度は俺たちの実家にも来てくださいね。

母さんたちも喜びますから」

「あ・・・・・・都合がつきましたらお電話をせてもうりますわ

「と聞こますと何が」「それこますか?」

「これからいろいろとおじくなるので。高校生は特に

澪の念押しに負けたのか、お待ちしてこますだけ言つて立ち上がつた。

「すみません、時間が無くなってしまったようです

「あ、直で来たの?」

「ええ、突撃訪問です」

「ふふ、面白かった?」

「はい、面白いものばかりでした」

「あ、めりやへ出て行つたんだが

「すみませんが兄さんとお話をさせてくれませんか？」

はあ？

驚きと疑問、そして嫌な予感がするため出来れば行きたくないのだが。

「ここに来た時点でもぬかれないよつだ。

「澪、いいか？」

「全然大丈夫。行つておいで。先に部屋に戻つているから」

そういう残し行つてしまつた。

大丈夫。

俺はこんなやつに負けない。

「順調のようだな」

「・・・・まあな

「それにしても本物がここまで可愛いとは思わなかつた。

さすが根っからのお嬢様なのかそれとも野澤家の教育がいいからな
のかは分からぬがほかの女より一緒にいて面白い。

「ここまでだと本氣で欲しいな

「うへー。」

「このつの言葉に俺はたくさんものを失つてきた。

あの家では第一優先はこいつだからだ。

「別にかまわないよね

確認でもないただの命令に負けそつになる。

でも俺は・・・・・・

「もしここで婚約者を変えたならばこいつが揃をするような立場に
なるんじゃないかな?」

「は?」

「お前らが何を取引するために俺を婚約者に仕立てたのかは分から
ないが、もし今お前に変えたとしたら白紙に戻すといつ事になつて
不利益が生じないか?」

「あつひはこいつの取引はつまそつだし」

「まあ今でもさつきりの範囲なのにそれ以上させられたら元も子もないしな」

はあ、しのげそうだ。

「じゃあお互いに良好の関係ならば問題ないな

は？なんだ、その良好な関係って。

「彼女が僕を選べば問題ない。

最近退屈してきたところだし新しいゲームだと思えば無駄な時間だと思わないし」

「何言つてあがる」

「ん、分からぬの？」

俺は今から彼女を落とす」と決めたよ。

面白そうなゲームになりそうだ」

落とす？

落とすって恋するってことだよな。

澪がこいつを愛すのか？

「じゃあ僕は帰るよ。せいぜい残りの任務を頑張って

そつこいながら俺の前から去つていい。」

「とにかく俺と澪との婚約期間は長いカウントダウンを始めたのだった。

「おかげ

「ただいま

澪、お前はどうしたの？」なる。

やつぱり俺のことは契約上の婚約者としか見ていないのだろうか？

俺は、俺は。

「どうかしたの？」

「…………いや、なんでもない」

俺は澪のことが好きだ。

私と不良の気持ち

おかしい、何かがおかしい。

最近そう思うのだ。

彼の行動が。

「何だろ? な

「どうかしたんですか?」

「あのね悠理」

今現在空き教室にいる。

通称 five 部屋。

歴代、そして現在の five しか入ることが許されない部屋。

実際は何も無いんだけど。

この部屋はいつもは一人になりたいときや話し合ひのときにしか使われない。

ただ今日は私もやして悠理も一人になりたかったみたいだ。

私の場合「」のもやもやした悩みが気になるだけ。

そして考えていてもじょうがないのでもやもやの原因の話をした。

「 要するに庄ちゃんの弟さんが来てから庄ちゃんの行動がおかしいと」

「うそ。なんかよそよそしい」というかなんと言つたか

私を見る田が変わったんだ。

なんといつか普通に接してたのにあの後から悲しそうな田。

例えば・・・・・永遠に別れるわけではないけれど遠くに行ってしまうようなときに見る田。

「それしあの弟が帰つてから戻つてきたとき何か言おうとしてたんだよね。

最終的に言わなかつたけれど

絶対「」のことに関係する何かを言おうとしてたと思つ。

これなら口に出さないようにしてたと思った。

今からじゅふ分言わない気がする。

「先輩ってこんなに他人のことで悩むんですね」

悠理、それは失礼に値する言葉よ。

まあ、否定はしないけれど。

だって面倒事嫌つて起じたないようにならなければ、他人のことは気にしないようにしていたもの。

相談されれば乗つたけれど。

「庄ちゃんに聞いたり早いですよねって言いたいところですけど今回ばかりはそうとも行きませんしね」

「だよね」

庄吾は今まで一緒にいて変なところ得意地というかプライドが高い。

しかもそのことに關するといつもは働かない頭がフル回転する。

このタイプはあまり好きではない。

私の場合は周囲から徐々に攻めていくため前置きが少し長い。

でも庄吾の場合は悠理みたいにまっすぐ来る。しかも臨機応変という最悪な形で。

周りが固まつていないと私の積み上げてきたものが壊れて話しあいに負ける。

ビハビハ。

「ただいま」

「おかえり」

桜が咲く前は言つても返つてこなかつたのに今返事が返つてくるといつ何気ないことにちょっと安心を覚えている。

「今日は遅かつたな。外でも出かけてたか?」

最近増えた同じような一言三。

なんで私が学校外に行かへんことを指んでこるんだやう。

そしてその日。

私はここにいるの。

ビハビハそんな事をあるの?

知りたい、知りたい。

庄吾が私に対して思つてること知りたい。

不良と夏祭り（一）

あいつが来て約2ヶ月。

何も無かった。そう、あの植えつけられた芽が本当は無いじゃない
かつて言つぐらー。

本当に何も無かったかのよつて時は進んでいた。

外では雁字搦めになるように仕掛けられているとも知りす。

「庄島、早くして」

「澪、そんなに急いだつていい」とねえぞ

「いいの」

俺たちは今この地域で一番早く開催される夏祭りに来ている。

門限上許されるのは高校生から。

小学生の楽しみは夏祭りの話を聞くだけといつ悲しいもの。

俺は結構行ったけどな。

だから澪にとっては初めての夏祭りだ。

朝からハイテンションだった澪。

数着あつた浴衣を楽しそうに選んでいたのは微笑ましかった。

『あ、庄吾はこれね

ポンツと布団の上にほかられた落ち着いた浴衣を見せられたときは驚いたが。

それから夕方になるとまづ俺の着付けをしてくれて、それから意氣揚々と1時間ほど部屋に籠もり支度をしていった。

その間に悠理たちに『デートですね』と口をかわしてからかわれていた。

それから部屋からよひよひ出てきた澪に少々見惚れて

『え、もしかして似合わない?』

なんか思い違いの言葉を発してくれて今に至る。

「おいしぃ」

出来立てのたこ焼きを口に入れ嬉しそうに葉巻を発す。

いつことひりは俺たちの生活と変わらないよつな気がする。

あの学校の生活は普通の寮制学校と変わらない。

初等部、中等部は給食のおばちゃんがいるが高等部はほとんど弁当だ。

もちろん自分で作っている。

話によると就職や一人暮らしする子には生活の基盤を作るためと将来自立しなければならない生活が来たときに対応するためだそうだ。この学校って金持ち学校とか言われながら豪華な生活はさせてないんだよな。

代わりに孤児院や貧乏でお金が無いけれど大学へ進学したいと言つ受験生たちにお金を使つてる。

澪曰く『徒然草の相模のかみの守時頬の母はだよーー』

為政者は僕約が大事であると言つことが書いてある段らしい。 BY

麻由子解説

お願いだから物語を使うのはやめてくれ。話が通じん。

「庄吾、庄吾」

「ぐ、あ、悪い。ボーッとしてた」

「人酔いでもした?」

「いや、ほんとにボーッとしてだけ。澪にどうかしたか?」

「たこ焼き食べるかなあって。奢つてもうらつたし」

「ああ。じゃあひとつ」

俺がそういうと澪はたこ焼きに刺さっていた爪楊枝をたこ焼きを刺したまま俺に差し出した。

うん、もしかしてこれは『あーん』ですか?

「・・・・え、猫舌?」

いえいえ確かに俺は猫舌だけれどそういう意味ではなくてね。

別にそんなに必死にふーふーしなくても大丈夫ですよ澪さん。

だから別に爪楊枝を渡すだけで・・・・・・・

「庄吾、あーん？」

完全に澪の可愛さに負けてしまった俺は従うのだった。

30秒後実は間接キスしていたことに気づいた俺はそのとき飲んでいたジュースでもせた事はあいつらに秘密だ。

不良と夏祭り（2）

それから俺はしばらく屋台を散策した後神社にあるベンチで座っていた。

なんでベンチがあるのかは知らないが健次の話によるといくつかあるこの夏祭りのベストポジションはここらしい。

まだこの土地のことを知っていたらもっとといいところを教えてあげられるのに・・・と残念そうに言っていた健次には感激この場所を教えてくれて心から感謝する。

いや今度麻由子絡みで何かあったとき絶対健次、お前の味方をする。
・・・お前が悪くなれば。

「もうすぐ夏休みか」

「ああ。澪は家に帰るのか？」

「部活があるし、そもそもお婆様の家以外は私の居場所なんてないからね」

寂しそうに笑う澪の笑顔を見て昔の俺を重ねた。

俺もあの家以外に居場所は無い。

今は慣れて、といつか諦めて思わなくなつたが昔の俺は居場所が無いことに寂しくて、自己陥落して、あいつを憎んだ。

澪も俺もそして後から知ったがこの学園全員が同じ。俺の心には少し前の思いは無い。

俺たちは他人の慈愛を受けて育つた人間だ。

そしてこの学園にいる人間だからこそなのだろうか。

自立し大人になつたとき俺たちは俺たちと同じ苦しみや悲しみを味わっている未来の子供たちに愛情を注ぐのだろう。

その苦しみと悲しみの連鎖を断ち切るためにとそのまた子供たちは本当の親の愛情を知つて暮らすために。

難しいことを珍しく悟つていた俺はふと現実に戻つてみると暖かいものが触れていたことに気づいた。

特に手に。

・・・・もしかするとの展開でしょうか。

「澪?」

「ん?」

俺の呼びかけに顔を向けたせいか俺と澪の顔が近い。

もし俺たちのことを見ていたら多分カップルで今は・・・

「このままキスしちゃう?」

「・・・」

「ひこひ霧園氣だ。」

もう少しひん澪の言葉でぶち壊しだけや。

むしりあなた遊んでません?

「もしかして反応なし? それはそれで傷つくんだナビ」

うーん、健次君のアドバイスどおりに従つたんだけどなあつと一言。

・・・あいつ何言いあがつたんだ。

「澪さん、あなたは何やってんの?」

「何つて庄吾を誘惑?」

「なんでセレは疑問系。なんでも俺を誘惑しようとしたの」

「だつて・・・弟君来てから私に対してもう見てたのがむ

かつくんだもん「

・・・・・『氣づいてたの。

あいつから澪をとられるのが嫌だ。でもその方法が無くて何も出来ない自分がもつと嫌で。

そんなことからいつの間にか俺は澪に対していつかは居なくなってしまう寂しさを向けていることは分かっていた。

でもそれ気づかれないようにしていたのに。

「確かに庄吾よりかつこいいし、紳士的だし、頭良いみたいだし」

「悪かつたな」

「でも・・・・・」

そっと澪の手が俺の頬に触れた。

「それでも私は庄吾がいい」

頬が熱い。それ以上に心が熱かった。

こんな言葉人生の中で言われただろうか。

あの家以外では皆すべてあいつが良いといった。

あいつの方が優っているから。

でも澪は、目の前にいる少女はすべてを知った上で俺を選んでくれた。

契約上の婚約者ではなく、一人の霧崎庄吾という人間として。

バーン、バンバン

遠くからは花火の音が聞こえる。

「庄吾？」

嬉しさのあまり俺は涙を流していることをえ気づいていなかつた。

そして澪はそれ以上言わずただ俺の涙を拭いた後寄り添いながら花火を見るのだった。

初めてのお祭り。

小さい頃お祭りを遠くから見ていただけだった。

お婆様とあの頃はちゃんと私を見ててくれたお父様からお祭りのことを聞いていた。

行ってみたかった。

そして今日、願いが叶うー！

朝から私はテンションが高かつたと思つ。

庄吾に『どんだけ行きたかったんだよ』と苦笑いされてしまった。

だつて初めてなんだもん。

それから拒否権を与えないため唐突に行くことを切り出して2人で行くことになった。

実は私が密かに作ったのは内緒。

こうこうときお婆様がすごいって思つ。

それから夕方になつて庄吾を浴衣に着替えた後私は普段はあまり凝つたマイクなんてしないから自信ないんだよね。

悠理に任せればよかつたかなあ？

そんな不安を抱えつつござ、出発。

いろんな出店を見て回つて楽しかつた。

射的は次に行くとき合つたら挑戦したい。

弓は得意だけれどが近いのか全然出来なかつた。

なのに庄吾つたら一発で落としたんだよ。

ちよとむかつく。

花火の時間が近いのかたくさん人が来て込んできた。

よく見てみるとカップルがぞろぞろ。

今庄吾と手をつないでいるけれどはぐれない為。

例え庄吾より一歩前に住んでいるのが長いといつてもそれは学園内の

話。

外に出れば全然分からぬ。この先に何があるとかどこに続いているとか。

ケータイを持つてゐるから連絡できるといつても合流するのは大変だ。

だから少人数で高校生ということはあまり知られていないし知らないでいい情報だ。

でも事情を知らない他の他人には多分カップルとして見られているのかなあ？

一応婚約者。紙の上での。

約半年で友達になれたと思ひ。

ちゃんと私として接してくれたと思ひ。

もし契約が切れたら、そのときは庄吾、あなたはどうする？

晴れたある日だつた。

なのに私にとつては、いや私にとつても嫌な予感がする始まりに過ぎなかつた。

「・・・また来た」

なんでもまた、という感想しか持たない手紙が1通。

そして庄吾にも同じく手紙が1通。

双方に関係するのは・・・本家からの手紙。

なんか嫌な予感がするんだよね。

だいたいこの手紙が来る時点で悪いことしか書かれていないことは分かつているのだけれど。

「澪、大丈夫か？」

手紙を見たま表情を歪ませている私を心配したのか寄つてきた被害者第一二号。

「本家から手紙が来たみたい」

それを言つとあまり表情を変える」とのない庄吾の顔が歪んだ。

嫌嫌でも開けるしかない道しかない私たちは同時に破つた。

「招待状? しかも庄吾の本家」

「俺はホテルに来いつて言つ通達」

ん? なんかおかしいような気がする。

確かに私が庄吾の本家の招待されることはまあ、察しつく。

どうせあの人たちに頼んで欲しいという意図が隠されているのだから。

でも何で庄吾がホテルに行かなければならないの?

「心当たりは?」

「・・・・いや」

考えたそぶりを見せて首を横に振つた。

「そりゃ。分からぬのならば行くしかないね」

ここで断つたら相手は何するか分からないから、そう続けていった
私は気づいてはいなかつた。

庄吾がどんな顔をして私を見ていたか。

不良と新しい婚約者

最悪だ。やう言つしかない。

田の前に立る女。澪とは違う女。

同じ女なのに、なんでむかむかするんだろう？

別に澪が化粧をしても綺麗とかそういうような感情しか思わないのにこの女には気持ち悪いとかそういう負の感情しかない。

はあ、どうやって破談にさせたかわざと計画、実行しないと俺のいろいろが納まらないかもしれない。

「ふうん、こいつがねえ」

お願ひだ、品定めするよいつな田を向かないでくれ。

澪は本質を見抜き価値を決めていた。一応俺自身を見ていることは変わりなかつたから何も感じなかつたがこいつの場合は違う。見た目だけだ。あとあいつが与えた俺が持つていての利益か。

「まあまあ、3・5点ね。ま、唯一の救いはタイプではないけれど好みつてことかな」

「・・・」

「何か答えてよ。つまらない男は嫌いなの」

「俺も気持ち悪い女は嫌いだ」

「な、あんな今なんて言った……わ、私に……！」

「俺はお前みたいな気持ち悪い女は嫌いなんだよ」

「あんたねえ・・・よくも多美丘グループの社長令嬢に言えるわね！？」

「知るかよそんなもん。俺には関係ない」

「お父様のお友達の紹介だったからしきうがなく来てやったのここんな仕打ち・・・許さない」

「どうぞどうぞ、潰してください」

確かに最近多美丘グループの下請けと本社の不穏なやり取りについて騒がしくなり始めたらしいから今はつぶすことは出来ないはず。

出来たら早くて1・2年。事によつては5年ぐらいか。

どう転び始めるかは分からぬけれど。

多美丘の令嬢さんはずかずかと歩いていて、扉を開けようとしたときふと思い出したように俺の方に振り向いた。

「あんた、野澤澪を知ってるのよね？」

まさかこの変哲も無いただの質問が波乱を起すとは誰も思っていないだろうか？

「ああ、知ってる」

「確かあんたは元婚約者だっけ」

「・・・まあな

「ふうん・・・」

「このまゝ、『元』で通っているのか。

「このときの女の口角が上がったことに俺は気づかなかつた。
そしてあこつと回じよつて欲しいものは絶対に手に入れるとこつ性格の持ち主と言つとも。」

私と不良の弟と

「きれいですね」

「春になれば満開の桜があるんだ咲くんですよ」

「それは楽しそうですね」

まあ予想していた通り庄吾の母親と弟君が出てきて一通り世間話をした後『庭を案内するよ』といつて弟君に自分の家の豪華さを説明するようにして現在に至る。

そんでもうつまらない。

はあ、堅苦しいの苦手・・・・

庄吾の母親も母親で中身がなこといつかいつわべだナビ四つか・・・・

この家全体が嫌いな雰囲気で包まれている。

多分庄吾のことを知らないで本当に紙の上の妻になつて庄吾にきておもやう思ひつと思ひつ。

「お楽しみになられましたか」

「ええ、楽しかつたわ」

ふふつと作り笑いをすれば何か戦略的な・・・何かを考えているよ
うな顔で見ていた。

なんか」の変化な」と考へていて

「そうね、実はですねあなたにいつておかなければならないこと
があるんですよ」

「なんですか」

「
こなったんですよ。もうひと兄も知
つてますよ」

「えつ？」

「ただいま」

「お帰り」

慣れてしまった存在。これからも隣に居るところ前提の存在。

だから拒むことは出来なかつた。

お婆様やお爺様が居なくなつてしまつたら本当に私の居場所がなくなつてしまふことは分かつてたから。

嘘でも契約上だらうと誰かが居て欲しいと思つていた。

でもそんな弱音、誰にもいえなくて、隠し通さなければならなくて。

本当は、本当は寂しかつたんだ。

お母様が死んで、お父様は現社長として忙しくて、お婆様やお爺様は私が一人になつても生きてけるようにしてくれたけれど私の望んでいたものはくれなかつた。

ただ傍に居て欲しかつた。

でもそんな私に一筋の光が差した。

霧沢庄吾。

庄吾は私が望んでいたことをしてくれた。受け止めてくれた。

だから排除しようなんて思わなかつた。

でも庄吾は違つたみたいだ。

庄吾にとつて私は本当にただの紙の上の婚約者だつたみたいだ。

「澪、どうかしたか？」

「ううん。今晚、グラタン食べたいんだけど庄吾は？」

「いいな、俺マカロニグラタン好きなんだ」

「分かった、今作るね」

庄吾がそう望むのなら私は・・・・・

不良と私と新しい婚約者（一）

俺の行動も言葉も思いもすべて自己満足だったんだ。

それが澪を傷つけるとも知らず、縮まりつつあつた距離に亀裂を入れているとも知らず。

翌週のことだった。

突然姉妹校の交流生として数ヶ月滞在する人間が来たことを知ったのは。

それは俺には関係の無いことだと思っていた。

だがそれは見当違いで。

「多美丘麗香、よろしくお願ひします」

気持ちの悪い作り笑いで自己紹介をする女。俺の現婚約者だ。

なんでここに・・・・・・

でも関わろうとしなければ澪が分かるわけがない。

「それから今、霧崎家とうちの家は親しい仲なので彼の隣でもいいですか？」

「・・・えつ？なら隣と交換してくれる？」

そういうと澪ではない人間が動いてくれたがこれで俺は放課後逃げられないことを知った。

しかもあの女絶対わざとほのめかしあがつたな。

だけど澪は気づいてはいみたいだ。

ただ知り合いのよつて俺と違う意味で“なんでこいつが”つていう目をしている。

わらわの言葉を深く考えてなくて助かったと思つ。

だけど俺はこいつが来たことによつて気が抜けなくなつた。

こいつも澪のことを知つてこいつとは何かしら仕掛けてくるに違いないから。俺にも、そして関係の無い澪の近くにいる人間も。

「ねえ、食堂つてどう？大きいの？」

「見てみれば」

「どんなメニューがあるの? カロコーヒーのへり?」

「知るか」

その後授業が終わるたび俺にへつて来て気持ちが悪い。

胃がむかむかするといふか。

今日の澪が作ったお弁当食べるか心配だ。

『残さず食べた後のお弁当を見るとなんか作った甲斐があるといふか嬉しいんだよね』

本当に嬉しそうに笑いながら話していた澪を見ているから嫌いな物が入つても食べるようになつた。

事実澪の作ったお弁当(というか料理全般)はおいしいし作つてもらつてるから文句は言えないしな。

でもこれが続くと無理かもしれない……

「ねえ、多美丘さん。あなたは知っているか知らないかは分からなけれど庄吾君は澪ちゃんの婚約者なの。だからあなたの行為はあまりよくないものだから離れたら?」

周囲も賛同するように注意する澪の信者、確か級長の野辺さ。

遠まわしなのか直球なのが分からぬのはこゝ特有なのか。

まあ直球に言つて過ぎると困り、遠まわしそうで分からなかつたのも困るからな。

「あら、まだ“元”婚約者が通つてますの?なら面倒だしもう一度血口紹介しますね」

そつと立ち上がると挑発するよつた田で野辺さん一同、いや實際は澪を見て手を胸当てる。

やばい、ここつ自分から……

「昨日をもひまして霧崎庄吾の婚約者は美丘麗香になりました。あなたたちの忠告を向けるのは私ではなくて後ろに立てる彼女じやんくて?」

「えつ?」

その言葉に俺は背筋が凍るとともに周つの一回じく澪を見る。

だけど澪は顔色ひとつ変えず堂々としている。

「澪、本当? あれだけ仲良かつたのに

「うそ、まあ、やうみたい」

事実を否定せずただ認める澪の姿を見て心が誰かに握られたみたいに痛みを感じた。

不良と私と新しい婚約者（2）

離れてこべ、離れてこべ。

田の前に面する、手を伸ばせば手に届く田の前。

離れてこべ、そんな気がしてならない。

「澪、」

「澪ちゃん、こっち来て」

「騒がしこから、早く」

わざわざと手を抜かずそのまま走り出してしまった澪。

先週まで『まよつ』と呼んで来る『まよつ』が行ったのを思いだす。

それもなくなってしまった。

今、隣に座るのは・・・・・

「ねえ、これ分かんないからやつて～～」

「自分でやれ」

このひるめこ女。

てこりが、こここの系列で何も勉強しないのは落札る一方でむしろ卒業するのが難しいの目に見えている。

“教える”はいいけど“やつてもらひ”は命取りの行為だ。

それでもつけてる香水が臭い。

「澪、これなんだけれど・・・」

「あ、これはね」

一番救われたのは部屋に関しては何も言わなかつた。

とこりがあいつ俺を使えば澪に勝てるモノがあるんじやないかと探つてんじやないか？

俺を使つても何も出でこねえつて。

早く分かれよ・・・・・

「庄吾は知つてたの？」

「え？」

「婚約者が変わること」

少しトーンが下がったような気がしたのは気のせいだろうか？

いや、俺がホテルに行つたときに知つた

「そつか・・・・・」

今、笑ってる澪の方を見たくない。

隣に居るのに見たくない。

だつてもう漆は・・・・・

新しい婚約者と天才（一）

先輩が庄吾先輩との婚約を破棄され変わりに庄吾先輩の弟である和真とかいつやつをなつたという話を聞いてから次の日のことだった。

「は？」

「なんか交換留学でも何でもいいから迎えてくれって」

「何でまた……」

朝早く叔母に呼び出されたと思つたら厄介な話を聞いた。

しかも今日の話。

私も嫌なんですけど……

多美丘麗香

通称厚顔無恥の根っからのお嬢様。

その上ライバル心というかいつも自分が上に居たがるのか態度は人を見下している。

だから私もそして、小さい頃から交流のある澪先輩も嫌っていた。

まあ、私はお母さんがたとえ金持ちであっても庶民として暮らしてきたわけなのであるお嬢様には嫌われているけど。

先輩の場合はライバル心めらめら立つた。

まず容姿も財力も言葉遣いにいたるまでも優つてていたから人目も引くし内心は置いといて外面上は人に接するのは物腰を柔らかくしていて金持ちだからという差別も無い。

当然人がまわりに集まる。

だつて同じ“金持ち”と呼ばれるカテゴリーに分類されていても見下してゐる人間とほかの人間と同等に扱われるのなら後者の方がいいでしょ？

だがこの根っからのお嬢様にはそれが気に食わなかつたみたいだ。それから澪先輩のやつてることは何でもまねしていた。

まあファッショնだけは違つたけれど。

・・・多分先輩から婚約者を取つたつて言うのを見せ付けたいんだ

よね。

馬鹿だねえ。

恋とか愛って時々すごいって思う時がある。

それで大恋愛をした末に結婚して子供に恵まれた人を知っているからかもしれないけれど。

だからそういう感情を持っている人間は強いと思う。

『恋は盲田』って言って“好き”っていう感情だけで周りを見ずに突つ走つてしまうのが欠点だが。

あの二人は大丈夫だろうか。

新しい婚約者と天才（2）

多分誰もが見ただけならば何も変わっていないように見えると思う。

しかし、私には分かる。

澪先輩は寂しそうに、庄吾先輩は苦しそうに互いを見ている。

一人共思いあつてゐることは同じなのに互いの思いは分からぬから言えないまま。

思えばあの出会いは正しかったのだろうか、間違っていたのだろうか。

誰に説いたつて誰にも答えは導き出せないだろう。

『事は小説より奇なり』ではないが人の出会いも小説よりも不思議なものであると思う。

お嬢様と一般庶民、いや不良と言つた方がいいか、この二人は今までどうりの生活をしていたら出会うはずはなかつたのだから。

「寂しきのよ

珍しく弱音を吐いた澪先輩に驚いた。

「どうしてかな？ 庄吾が隣に居ないだけで寂しきの

「でも一緒に生活していますよね？」

「うん、でも……寂しきの。何でだるうへ

由傷氣味に笑う先輩の笑顔はどうか痛々しい。

厚顔無恥のお嬢様が来て数日が経つたことだ。

「先輩は……望まないんですか？」

「庄吾先輩が居ることを。弟の方ではなく……」

「そうね、我が仮が通されるなら一緒に居たいわ。

意外に退屈しなかつたかな。庄吾が婚約者になつて数ヶ月。

むしろ楽しかつたかも。

この数年間色が無かつた生活にいきなり入つてきた鮮やかな色に塗りつぶされて「

ふふ・・・・っと普段はすることのない思い出し笑いをする澪先輩にすこし頬が綻ぶ。

望むことも期待することも諦めたようにしない澪先輩がいつの間にか望むようになつたのだ、自分の本当の気持ちを。

「でも私は人を縛り付けるようなことは出来ない人間だから・・・・・

もし庄吾が私との結婚を望んでいないなら・・・・・その時は庄吾が望むとおりにする」

「庄吾先輩だつてあんな厚顔無恥よりも先輩の方がいいですよ。

現に会う度に愚痴を聞いてあげてるんですからね」

「私は人を愛せないから関係ないのよ。

だから婚約破棄もすぐに出来そうなアレなら別にかまわない。

庄吾が自分から愛せる人と暮らすことが何より大切だから」

仮面を被つて笑っている。

でも私が最初に見た完璧な仮面ではない。

だって誰が見ても先輩は、泣いているようにしか見えないのだから。

あのお嬢様が居座つて悠理に初めて自分の・・・庄吾にも誰ににも言えなかつた本当の気持ちを言つた。

笑えない話だが自分の気持ちを伝えるのは苦手だ。

それは小さい頃からの教育やお母さんたちを心配させないためと思ひ込んでいた幼い自分が今の自分に影響しているのかも知れない。

でも悠理ならスッと普通に言えた。

多分、本当の私を見抜いた悠理だからこそなのかもしれないのだけれど。

「あら、元婚約者さん。こんばんは」

びつじつといい気分に浸つていたのにあなたに会つてしまふか。

出来れば・・・帰つてほしぐらいだ。

「いや、もう決まっているんだよ。」

その前に「うひ」ともないうちに決まっている。

「うひ」とは

スルーが一番。

「な、なんでおひにならのよ」

「何を？」

「あんたの婚約者が取られたのよ？」

「……親の決めたものだから実際は友達だし、私のほうもやめさせよつと思えばやめられんじ。

そういう句がいつよつともないと思ひなさい

「それは……わうだけれども。

……で、でもあんな不屈き者のよつをわざと置き続けていたあなたの本心が分からないわ。

どうせ私と同じように金田町でだつたんでしょう。

それが新しい事業を始める資金源の調達か

「……本気でおひるん？」

今、心の中でふつふつと湧き上がってくるものがある。

庄吾が不届き者？

まさか。見た目は目つきも悪いし柄も悪そうに見えるけれど、ちょっと不器用だけど心遣いも出来る優しい人なのに。

それを・・・・

「『めん、物珍しがだつたか』

彼女の品の無い笑いが私の甘い考えを苦しめる。

ああ、私の手で一人にさせるべきだったのかと。

本当は自分が甘えてしまつてずるずるとこの関係が続けてしまつと思っていたから何も言わなかつたのに。

人を愛せないくせに愛してほしいと願つてしまつ私のために彼ををもうこれ以上巻き込ませないために。

「それにしてもつまらない男ね」

「・・・黙れ」

「え？」

「黙れって言つてんでしょう」

暗い中でも田が冴えてきているのか今彼女の顔が引きつっているのが分かる。

昔から彼女のこと嫌いだつたけれど大企業の取引先といつ名田だけである程度の口の悪さや態度は田を騒つてきたのに。

彼女はそれを分かつていなかつたのようだ。

ついでに庄吾には悪いがあの弟も潰そうか。

調べて分かつたところ彼の目的は私の体と権限だつたみたいだから。もちろん昨日あたりに後ろ盾は潰してもらつたからあの弟は慌てるだらう。

そして明日あたりにけりをつけに行つて来るか。

ああ、どうもこつも、

「うるせえんだよ」

不良と大切な人（1）

その日はえらく澪はあわただしく、そして綺麗な格好で出て行った。

何も言わずただ俺の朝ごはんと朝食の用意をして。

それはいつもしている『ねはり』とこいつは嘘偽りなく。

「はあ・・・」

なんだか暇だ。

いつもしているゲームやテレビを見ても面白くない。

普段は時間が忘れるぐらにやり続けているのに。

多分、澪がいないせいであるけれども。

・・・・どうしてあんなに急いで出て行ったんだろう。いつもよつ
綺麗な格好で。

いや、澪がいつも手を抜いているわけではないが少しメイクの仕方
?みたいな、雰囲気って言うものがまったく違った。

誰かに会つみたいだけれど。

その誰かが女であつてほしこと思ひのは俺のエゴなんだらう。

今はただの友人であるだけなのだから検索する権利なんてどこにも無い。

それを知つたのは毎過ぎだつた。

多分、明日の朝刊でじゅうかが一面に載せるか新聞社が話し合つような内容。

多美丘グループの次々に表ざたになる不穏な影と霧崎コーポレーションが野澤財閥に吸収合併された。

もちろん野澤財閥の名前になつたのは言つまでも無い。

じつじてになつたのは分からぬ。

確かに独立した共同部門の傘下の会社を作るといふ話だつたはず。

それこそ合併なんて話は聞いてない。

でも澪が急いで出て行つたのはうなづけるかもしれない。

・・・・・俺はまた一人になるのかと心のそこにある小さな自分が叫んでる。

俺はまだ・・・・ここに居たいのに。

不良と大切な人（2）

夕方、一日中暇だった俺は今柄には無いことをやつてこる。

花の水遣り。

事の発端は数時間ぶりに来た澪からのメール。

『花に水やるの忘れたからお願ひ（ハート）』

俺に恥をさらせと？

そんな気がしてならない文章にやつた振りをしようとしたが・・・

・・・・ハートでつられました。

・・・簡単で悪かったな。

もちろんおかげで後ろから、

「霧崎先輩が花遣りを・・・」

と珍しい目で見られている。

別に悪いことしてるわけじゃないし俺が水遣りをしようと伺ひよう
と勝手だらうが！！

「庄ちゃん意外なことしてるね」

そつ無愛想に言つてきたのはこの学校の女バスのHース、いやこの学校に君臨している女王。

「悠理笑うな」

「えへへ、澪先輩結構いい趣味してると私は思いますけれど」

あの趣味をいい趣味といつお前らが分からねえよ。

視線を花に戻し水をまぐ。

たつく、いつもこんな大きな範囲をやつてるのかあいつは。

「ハートで釣られて今度は先輩と一緒にいるために花の水遣りの手伝いですか?」

ドキッと心臓が止まりそうになつた。

つーか何でこいつは知つてんだよ。

時間が止まつたように動かない俺を見て同じよつよびつくりしていわお姫様。

「え・・・マジ?」

え、まさかの予想でした?

それから後ろからお姫様の笑い声がとめどなく聞こえたのはいつまでも無い。

もつ悠理笑うな!!

不良と大切な人（3）

「で、なんでお前はここにいるんだよ」

一番疑問である言葉を投げかけた。

「可奈ちゃんが教えてくれました。澪先輩の隣にいる人が水遣りをしているって」

「そう」

この学校の女王悠理は異常なまでの運動神経の持ち主のためか、残酷なほど率直に考えなしに言ってしまう性格のせいか

俺は後方のせいだと思うが 人に好かれることがない。

実際9年ほど在住しているくせに親友と呼べる友はあまりいないといふ話を聞いた。

しかも彼女と同じように“異能”と言われる存在の人間。

その中でダイヤの原石と呼ばれるほど未発達な天才の一人が彼女の後輩である灯聖可奈。

俺は初対面で彼女に嫌われたみたいで、内心名前を呼ばれないほど嫌われているらしい。

「そんなことよつ、澪先輩びいしたんですか？」

「それがどこにいったのかわからんねえんだよ」

「え？」

一瞬トーンが低くなつたのは氣のせいだらうか？

「朝、慌しく出でつたんだ」

「まさか・・・

「どうした」

悠理の顔色が悪くなつていくのが見える。

もしかして俺はとんでもないことをしてしまつたかもしれない。

俺は知らなかつた真実をして走り出した。

まさか俺が知らないところでこんなことになつているなんて。

澪がそんなことに巻き込まれそつになつてているなんて知らなかつた。

『芽を摘みにいつたんだと思います』

なにを？

『澪先輩に対する凶器にもなつづる芽を』

芽？

『あの弟・・・・澪先輩を襲わせようと、していたみたい、なん
です』

え、・・・・・

『もちろん、大きな芽はとりましたが小さな芽は取り除き切れてい
ないので元凶そのものを取りに行つたんだと思います』

不良と大切な人（4）

走って、走って、行き着いたのは校門。

でもその前には車が止まっていた。

降りてきたのは・・・・・濶。

大丈夫なのか。

怖い思いをしてないか。

いろんな思いがうずいているのにうまく言葉が出ない。

声に出せ。

思つてこるものすべてを。

そして、濶に対する謝罪を。

でも俺は動けなかつた。

だって、たとえ俺が関わっていなーとしても一般的に見れば同罪。

だってそりこいつ計画は知つていなかつたとしても恋愛をゲームとして澪を遊ぼうとしていたことは知つていたのだから。

あの時意地でも止めておけばよかつた。

かっこ悪くても、馬鹿にされても、止めておけばよかつたんだ。

俺は・・・澪を売つてしまつたことは変わりないのだから。

「庄吾、どうしたの？」

突つ立つてこいる俺に気づいた澪は無邪気な目をして俺を見つめる。

「澪・・・」

「あ、一コース見たのね。大丈夫。その話は後にするけれど別に庄吾が出て行くとかそういう事は無いから。

お金のこととかも心配しないで。

時間はかかるけれど対策は練つてあるから

俺が会社がなくなつたことを気にしていると毎日でこるのかやう話を
をする。

そりやない。

俺にひとつ会社なんぞどうでもいい。

家族のこととは気になるけれど、約半年遅を見てきたから悪いよう
に思つていいな」と思つ。

今俺が気になつていいのは……

「どうしたの？」庄吾

田の前にいる元婚約者で、俺の一番愛しい人。

「！」ねん

「え？」

「！」ねん

グイッと俺の方へ引っ張つた。

すっぽりと抱きしめやすい大きさの漆。

近づいてこんなにも小さかったのかと実感する。

「めで、怖い思いせせて。

「めで、守れなくて。

「めで、こんな臆病者の俺で。

「めで、こんな小さな体で大きな傷を負わせてしまつて。

私と大切な人（1）

『俺の・・・兄貴のこと好きですか?』

腹を割つて話したら出てきた元婚約者の本心の言葉。

私は人を愛せないから。

私は人の愛し方を知らないから。

私は彼を幸せにすることも方法も知らないから。

だから私は彼を“解放”しないといけないので。

でも・・・

「ごめん」

そつ言つて私を抱きしめる彼を見て決心が揺らぎそつになる。

大丈夫、気にしていないから。

大丈夫、何も無かつたんだから。

大丈夫、あなたは悪くないよ。

言いたい。

抱きしめたい。

“好き”って言いたい。

でも私には・・・

「あの・・・庄吾」

「なんだ」

「みんなの目の前で抱きしめられるのは・・・ちょっと恥ずかしいんだけど」

事実を突きつけるとわれに返つたように周りを見渡す彼。

触つてきたときこつもより体温が高かつたから多分走つてきたのだ
るべ。

それがこの騒ぎを呼んだんだと思つ。

「わ、悪い」

状況を把握したのか彼は慌てて私から離れる。

顔を真っ赤にしている彼がちょっと可愛く見えた。

男に“可愛い”は禁句ですからね、そう健二君にアドバイスを貢つたがやっぱり可愛いものは可愛い。

そしてちょっと嫉妬してる。

「庄吾、部屋にいらっしゃか

だつてこれを見てるのは私だけじゃないんだもの。

ガツチャンッと鍵を掛けた音が聞こえるとああ、これで終わるんだなあって体温が下がっていくのを感じる。

なんか別れを切り出すような気分だ。

いや、実際に切り出すんだけれど、それは普通の別れではなくてただの位置づけが変わるだけで友人としてなら何年も付き合つことが出来る。

紙の上では婚約者であっても現実の関係がそつだつたのだから生活にせよほど変わりはないのだろう。

私の庄吾に対する気持ち以外は。

私と大切な人（2）

彼が喧嘩、というか一方的に私が怒つて数時間した後の部屋に戻ってきた時のことを思い出す。

血相変えて私の無用心さを叱つたけ。

私はその言葉がとつても嬉しかった。

この学校に盗みを働くよつなやつはいないことも私を襲おうとするやつもないことも知つてゐる。

でも、ほとんど知らない相手に対しても怒るよつな人なんていないから。

ああ、私のこと本氣で心配してくれる人だ。

そう思つたのだった。

それが彼のことによく知りたいと思つた理由であり一緒にいることを許したときだった。

「多分テレビで見たと思つけれど」存知の通り霧崎コーポレーションは吸収合併して私の会社の傘下に入ったの。

もちろん庄吾のお父さんも、さすがにトップクラスは無理だけれど、できるだけいい役職に入れるように交渉したから。

ただ・・・・・

「ただ?」

「私の口から言つていいのか悪いのか判断しづらいのだけれど、多分庄吾の『両親離婚するかもしれないかな。私のせい』で。『ごめん』

「いや、そんなの俺ら知つてたし濶が謝ることじやなによ。もともとこななることぐらい」どうの昔から分かっていたことだから。

むしろ親父の働き口をくれただけでもありがたいよ。

あの人も実家は金持ちだから心配する必要もねえし。

あ、親権はくすねるな。俺は親父に押し付けてあいつだけほしいとか

ねえ、庄吾? 今自分がどんな顔してるか知つてる?

悲しそうな、やつきれないうつな、そんな目をしてるんだよ。

まるで、いつぞやの私みたい。

夕日を浴びる彼の顔は未来を諦めている顔だ。

私は彼に未来を諦めて欲しくないとthought。

だつて私を一番に考へてくれた他人は庄吾、あなたが初めてなんだよ。

私だつてあなたのこと一番に考へているから。

「ねえ、ある人と養子縁組しない？」

「・・・は？」

「和真君はア承してくれたんだけれど、古い親戚にね子供がほしいつていう人がいるんだ。正確には後継者だけれど。

それで、もしあの親たちの元に居なくなつたらその人と養子縁組しない？

もちろんこつちもバックアップ体制できてるし、あの親たちとも交渉してあるから。

あとは庄吾の意思だけ。

もちろん、した後は後継者になれて言つわけじゃなく庄吾が自分の進みたい方向に進んでいいよ。

和真君は継ぐ気満々だから気にせず勉強できると思つし。

「えり、考えてくれない？」

「え・・・ いきなりそりこわれても」

うん、そうだよね。

私のやさしさにしてことはかなり贊否両論のある話。

いや、三分の一が否に回るそつなどだ。

でもあの堕落した親たちの元にいるのは一人とももつたひない人材なの。

それを生かすためにはこれが一番の方法だった。

そして私の元から離れさせることの出来る唯一の切り札。

『好きよ。愛してるわ』

『ならこんなことやるなよ。もひとつ別の方法が、』

『いいのよ。例外は認める」とは出来ない。たとえ、当主であっても

私の好きな花、椿が咲く時期がもうすぐ近づいていた。

綺麗なのに散り方は残酷な椿の花。

不良と新しい人たち

「私はあなたの母親なのよ。豊だつているし……」

それなのに私を出て行かせるの?」

本当はこんな小娘に頭を下げたくは無いが今は一大事だからしきりがない。

もしこの小娘の支持を得ないとこの先が無い。

そんな表情が見て取れる。

私はいつもなら貼り付けた笑みで言葉をつなぐのだが今日はもうその必要は無いから素を出したままで行く。

これが私の最初で最後のこの人に対する復讐だ。

「豊は私たちのほうで引き取させていただきます。

もちろん、何不自由なく育てさせていただきます。

心配なく。

それから・・・あなたは私のことを娘と思つていないくせにこんな

とせに限つて母親すひじみつといしなこでべだせ。

もぢりん有印私文書偽造として被害届けもだしますし、その損害賠償も覚悟してくださいね

彼女はまさかいつなつてゐとは思つていなかつたのだひつ。

厚化粧でも書きめこるのが分かる。

まあ、この人のおかげで3年かかると思つていた計画が一氣に動き出したのだが。

それでも野澤財閥の損失のことを考えたら償つてもうわなければならぬ。

「相變わらず・・・俺は豊のおもむきなんだな

澪の古い親戚であるある人ととの対面とお礼等々を書つため久しぶりにやつてきたと思つたら豊に遊ばれています。

「当たり前じゃない。豊、あれ以来から庄吾の」と云つてゐるんだから

「豊君も上に立つものさうひやつて動かすんです。

よかつたね、兄さん。豊君の下僕第一昂だよ

「二人して何のことをな」と言つてんだよ。

つて、和真、俺のこと……」

「豊アタ～～～ック

あつけに取られていたら豊の蹴りが命中。

イツテ～～～

「参ったか、怪獸

「俺は怪獸じゃねえ……」

「豊ガンバレ～～

「怪獸じゃなくて珍獸でしうかね」

怪獸、ひとことにこの船の一方的な攻撃を受ける俺を尻目に和やかに過ごす2人を見て俺は思つのだつた。

類は友を呼ぶとこうのま「ひこひ」とかと……。

なぜ俺の周りにま「んなやつしかいないんだ。

不良と私との決断（1）

しばらくして俺たちは豊を部屋において別の部屋へと移つた。

そして待つていたのは40代後半の夫婦がいた。

ひととも顔立ちが綺麗で優雅といつ言葉が似合ひそんな夫婦。

「お久しぶりです、恵美子小母様、隆吉小父様」

「お久しぶりね、澪ちゃん。ますますお母様に似ていらしゃって嬉しいわ。

小母さん、あんな不届き者に似ているところが見えなくて喜んでい
るわ」「

「やうだな。あの恥ぢに似なくてよかつたよかつた」

・・・・話が見えないなんだけれど。

まったく何を指しているのか分からぬ俺と和真はいつの間にか座
つてしまつた澪のせいで座るタイミングを逃してしまつた。

ところか・・・」の夫婦どつかで見たことあるかも。

「すみませんね、こんな不屈を薦めで」

「の場にいる人ではない男の声が聞こえた。

振り返つてみるととても若い男性。

そして、雰囲気が……

「お父さんお久しぶり

澪に似てる。

「ただいま、澪」

「はじめまして、といつべきかな。

元当主である栄治です。

君たちには・・・特に庄吾くんかな?君には一番迷惑をかけてしまつた

「いえ、とんでもないです。

この事態も何年前から予測できていたことですからむしろ感謝したいぐらいです。

もし野澤の人たちが介入してくれなかつたらもつと酷い事態を招いていたと思います」

「それからもしあの親元にいたら俺たちも腐つていたと思います。それを救つていただた上、しかもこんな待遇まで用意していただきありがとうございます」

二人そろつて現当主で遼の父親やその周りの人たちに頭を下げる。

いつだつてそうだ。

この人たちに助けられて過ぐしている。

いつか、いや絶対恩返しをする。

たぶんこの思いは隣にいるやつも同じ。

「ずいぶん根のいい子達をいただきましたね。

ちょっといたまれない気持ちだわ」

「それにしても庄吾君は澪ちゃんの表面上は婚約者だったんだろう?

その辺の情は言ひのかい?

「こいつもこれは最後の確認に近いけれど、

最後の確認？

「どうしたことだ？」

「はい、たとえ情があつたとしても気持ちには変わりません。

当主であつても例外は許されていないのは存知のはずですが」

「そう……」

澪のその言葉の決意に鳥肌が立つた。

寒いのだ。恐怖といひ寒さが襲っている。

嫌な予感がする。

「すみません、どうしたことか説明していただけますか？」

冷たく凍つて動けない俺に代わって聞いた和真。

その言葉に澪の表情が一瞬崩れたのはなぜだろう。

「なんだ説明しておらんかったのか。

血縁は日本の法律上は二等親までと決められておるがこの家だけは
7等親までと代々決まっておるんだ。

もちろん当主だからとか養子だからとかの例外もなし。

ちょうど私たちの家系は6等親。

ここで養子縁組をすると婚約は不可になってしまふんだ。

それで今この場が最後の確認ついでわけだ

田の前が真っ暗になつた。

俺は一ひとつ一つの選択を迫られていた。

愛を取るか、将来を取るか。

不良と私と決断（2）

「ま、友人ならこういう話は関係ないか」

ポーカーフェイスの顔のおかげか俺の動搖は2人には気づいていた。かつた。

隣にいるやつは・・・多分何年も疎遠な暮らしがしても血のつながっているからだらう、俺の気持ちにいち早く気づいていた。

澪がそうこうしようと叫びひととま、俺には向こも感情が無いつていることだらう。

でも俺は好きなんだ。

澪を愛している。

だから嫌なんだ。

こんなことで澪を諦めることを、何もせずただ見ているだけは。

「・・・・俺は、お断りさせていただきます」

「「え？」」

「ちよ、庄町へ。」

「」の話、俺はお断りさせていただきます。

もちらん教育費もいもひ儲つてこる分は一生かけてお返しあつたこと思こます。

ですが「」の話を受けますと俺に損益が発生する「」といふかもつた。

あつがたい話ですが、俺は・・・

「庄町、何言つてこの？もっこ」のままだつたら・・・

「ああ、親父だったら俺の今まで借金しちただけど、でもここんだ。

これよりかはまじ」

何もしなこままで終わるより何かして終わつた方がいい。

「のまま甘さじて生活なんて無理だから。

「うひほん、その損益とは何かな？」

「え？」

「君の言葉を言へ換えるとその損益を出すなればいいんだよな？」

だからその損益を言へたまえ」

まさかやつこいつ風に来るとは思わなかつた・・・

その損益がまさか漆への告白とこいつの場で言へるわけではなく
ただ動搖しているだけだった。

不良と田畠（一）

動搖して何も言えない俺にホローなのか話を変えるためなのか和真の口が開いたとき、大きな、泣き声が外から聞こえた。

「呼んでおりますわね」

「父親であるあなたが行くべくなんだろ？けれど意味がないものね。」

「ひつじ二二二、二二二で休憩してしまじょうか。」

「もつやんな時間なしね」

「もつやんな時間なのか。」

「時間を見ると2時間ほど経っている。」

・・・ビツビツで豊が騒ぐわけだ。

昼が過ぎ夕方。

話合いの再開もしたいが当事者である澪の小父さん夫婦が帰ってしまったので今日はこれで解散となつた。

ん、で今俺は・・・・

「庄吾？ 向吾つかひつけられてんの？」

外の風よりも冷たい空気^{くうき}に曝^{さら}されております。

怖え・・・・

久しぶりに本氣^{ほんき}で怒^のてるといひの見た。

とこつか素^そがもう出てますよ邊さん。

「こや、わざわざおつたとおつこですね・・・・

「なあにそれ？ 今からわざわざ終わらせて貰^{もら}へくれる？

庄吾^{しょうご}がしないんだつたら意地でも終わらせ^{せしめ}てやるからね

やめてください。俺のやる」とです。

ところがどうして怒^のてんだけよ。

俺怒^のるよ^うなーとは何もしてないよーー

扉^とがスッ^と開いたと思つたら和真^{わま}が出てきた。

あれ？ お前帰つたんじゃなかつたんだっけ？

澪の顔色を見て何が分かったのか俺の方に視線を向けた。

「俺たちは今保護されている状態なんですよ」

「え？」

保護されてる？

「考えてみてよ。」

あのヒステリックの母親と墮落した男がここに乗り込んでこない時
点でおかしいと思いませんか？」

「まあ、俺のことはいいとして母親だったら意地でもお前を取り戻
そつとするし、父親だって会社を経営できた頭もあるんだから俺を
引き取つて稼がせるつていうてもかんがる事ができるけれど・・・」

「この人が無理やりにでも誓約書を書かせたんですよ。」

あんたたちの生活が安定するまで俺らを預かるつて、ね。

だから俺たちは親権はあの母親たちにあるものの干渉できないとい
う状態にある。

しかもあの母親は弁護士立て誓約書を無効にするつもりみたいだ
し。

だから一刻も早く養子縁組しないと取り消されてしまつわけ

「それで・・・」

それで濶怒つてたのか・・・

「言わなくてこい」とかペペヒアヒアするお口な

「言わなきやいけなこととを言わなないのはやつりでしうが。
ビツして変わりに俺が言わなきやいなこんだ
「俺だつて言いたくねえよ、そつぱつとまた出て行つた。

最近のあいつの行動が見えなくなつてきっこのは俺だけだらうか?

「ま、そういうわけだから、早めにしてね。

相手が父親だつたらまだいいんだけれど母親だから親権に關しては
強いのよ。

この虚構の鉄壁が崩れるのも時間の問題なの

そうなつたら守れないじゃない。

ぼそつと聞いた濶の本音に胸が熱くなる。

ああ、どんなことがあっても傷つかよつとしなこうつぶさるとこ
は濶なんだなあつと感じてしまつ。

俺はやつこいつ漆が、

「好きだ」

・・・・・俺、声出してなかつたか?

うん、ほつんと言つたね、好きと。

それって・・・ヤバくね?

恐る恐る漆の顔を見るとポカーンとしている。

「はー。」

今、俺はとさでもなことをしてしまつたようです。

不良と田畠（2）

ポカーンとびっくりして固まっている澪。

俺もまだ状況が飲み込めない。

俺は今わざと告白をしました。

ええ、『好き』言いましたよ。

それっていわゆる・・・失恋を自分からしたもんじゃないか！！

ええい！！

そのまま押し通せ！！

「庄吾、そんなに私心配させるようなことした？」

・・・あれ。なんか俺とは違う方向に行っていますが。

「うーん最近かまつて無かつたから心配になつたの？」

大丈夫、嫌いになつて避けてたとかじゃないからね。

ちょっと忙しかったから。

「これがひと段落したら要ちゃんたちとこっしょにじぶんが行こうね」

「あ、ああ」

それって勘違いプラススルーパターンですか。

俺の告白は無効ですか？！

なぜか楽しそうに話す澪を見てがっくりする。

分かっていてもへこむぜ、これ。

ふすまに手をかけて何を思い出したのか、いや、澪の雰囲気からもうではないと語っている。

そして視線は俺の方に向けられた。

「それから、悠理にも指摘されたんだけれどね・・・私は人を愛しているよつで愛してないつて。

私もそう思つ。

私は人を平等に扱うことしか出来ない。

扱う方法しか知らないの。

「ごめんね、私が人を愛せなくて」

笑つて出て行つた澪の残像が頭から離れない。

笑つていた。

笑つていたけれど・・・泣いていた。

泣いていたんだ。

いつもは泣かない澪が。

俺はその場から何かに取り付かれたんじゃないかといいうべらにずっと固まつていた。

失恋したからとかではなく何かぽつかりと穴が開いたみたいで。

それから澪といふ事が語づらなくて澪を避けていた。

もちろんその様子に気づいている人がちらほらと感じたが何も言わ
れなかつた。

澪も、多分避けている理由を知つてはいるから悲しそうな顔をしても
見て見ぬ振りをされた。

それが今の俺には心地よかつた。

「はああああ

以前澪の祖父である源次郎さんに俺がスペイになれと言われた場所
にいる。

やつぱりここが一番落ち着くのだ。

今の俺の気持ちに似ていて。

ギーギー

誰かが近づいてくる音が聞こえて顔を上げると、

「おや、君は……」

「へえ。君もこじが好きなの。

凛香もこじが好きでね、お気に入りの場所だったから久しぶりにここに来たんだ

にじつと笑う栄治さん。

凛香・・・やんは澪の母親だろ？

やつこえは澪のことあまり知らないことに気がついた。

澪のお母さんが死んだといつては聞いているけれどどんな人かとかは知らない。

ただ澪が小さこときから忙しく働いていたみたいだし。

「懐かしいな。凛香もねえ逃げるのは早かつたしね

えっと、何が早かったんですか？

「君、澪のこと好きですか？」

・・・すみません、疑問に聞けないんですけれど。

つこでこ後ろにある黒いものをしまつていただけると嬉しいのですが。

このとき漆は母親にだと思っていたが性格は父親にだと確信した。

この父親怒らせなによくにしておいで。

「振られたのか」

「はー」

親の気持ちとして分かるけれど俺の前で意気揚々と嬉しそうにしないでください。

俺だつて凹みますから。

「なんだかねえ・・・やつぱりいつの凜香の血を受け継いでんだねえ」

遠い田をしながら思こ出すよつて言葉をさ。

そこには懐しみも入つてこぬよつた気がするのはほんのせいだらうか?

「凜香にね付せ合ひつ前に言われた言葉をつくづく。

凛香の中の定義は“愛されている家庭に育てられた人間がが愛し、愛される価値がある”だつだんだよ。

まあそれを直してくれた人たちのおかげで結婚できたんだろつけど、ただ最初つから人は愛し方を知つてゐるわけじやないことに気がついてほしいね。

君は澪の愛し方を知つてゐるか？」

「いえ、まず人の愛し方さえ知りません」

俺だつて凛香さんの定義だつたら愛される価値も愛す価値も無い。

でも俺は澪に愛したいと思つし愛されたいとも思つ。

それはいけないことだらうか、いや違つと思つ。

そういう気持ちは誰でも持つてゐるものだし、まず価値つてなんだ?

そう思つてしまつ。

そつしたいならば俺はそつするといふと思つ。

ただそれが行き過ぎると問題にはなるが。

「どうう?人はさ、初めて好きだと感じた人と一緒にいることで愛し方を暗中模索してくんんだよ」

「セリですね」

なんとなくだけれど光が見えてきた感がある。

もう一回、もう一回澪の言つた言葉を撤回させ澪が本当に俺のこと
どう思つてこるか聞いて。

それでも見込みが無かつたら諦める。

でも可能性があるな……・・・突っ走ってやる。

不良と元町主（後書き）

もうすぐ本編が終わります！！！
やった！！

さて、庄吾は漆の壁を突破できるのでしょうか？

私と元当主（一）

『好きだ』

そう言われたとき純粋に嬉しかった。

彼以外に言われたら裏にいろいろな疑惑があると思つてしまつた。そつ思わなかつた。

多分彼を知つてゐるから。

彼を好きになつてしまつたから。

でも、私は・・・

「豊、どうしたの？」

「だつて・・・」

珍しく甘えてこないこの子が引つ付くよつて離れない。

「庄吾、悲しそう」

「え？」

「庄吾、悲しそうな顔してた。澪お姉ちゃん、庄吾にいい子いい子して

多分私が振って気まずいのを感じ取ったんだと思つ。

つぐづく馬鹿だなあつと考えさせられが自分の決めたことを曲げる氣は無い。

まずは彼らを安全で信頼置けるところに移さなければならぬ。

ただ、彼と大きな溝が出来たことは大きな私にとってもその周りにとっても損害だったことが分かる。

次ここへ来るまでに、前と同じように、とはいからくても友人として笑つてこられるようにしたい。

「豊がいい子にしたら庄吾悲しまない？」

「え・・・ひとつ庄吾には私がいい子にこすするから今まで遅いし寝よいか

「う、ん。澪お姉ちゃん絶対だよ？ 庄吾もひやんとしてね」

「うん、約束」

そつぱつて描きりげんまんすると豊はバタバタと布団に入ってしまった。

多分、察しのこだから今まで退出しても気にしないだらう。

だけど・・・・の描き方は守れないかもしね。

元々こいつなつた原因が私だから。

とこじりとこじりと音を立てないように部屋に戻る。

明日、朝一で庄吾に話しかこじよひ。

私も「のままじゃいけないしね。

「澪」

だけどその前に珍しい人が私の前にやつってきた。

一応珍しここいつ言葉を使つことは無いはずなのだが。

私と元当主（2）

昔から父はほか、というか一部の親戚から嫌われていた。

みんな穏やかで信じ込みやすくそして心が綺麗な人たちの集まりであるこの一族が嫌う人。

どんな事情であれ傷ついた人たち、罪もないのに傷つけられる人たち、そして同じ人間なのに経歴などで差別される人たちを無条件で受け入れるのに受け入れない人物。

なぜ嫌われていたのかは小さい頃は分からなかつたが今は分かるよう気がした。

当時の父は最初に欲しかったものは母ではなく母の後ろにあるもの。

親戚の中でもブレーンである私たち直系を欲しがつた。

それを知っていた人たちみな嫌がる。

だつてそれは“私たち”を見ていないことにつながるのだから。

「大きくなりましたね」

「人間、成長期には大きくなります」

「庄吾君も大きかったですね。隣に座つてしゃべっていましたが僕よりも少し大きいですね」

ちらつと見えたのですが背中と腕に傷がありました。やうとう古い。

運動していたのでしょうかね?」

「まさか、庄吾の」と調べたの?！」

「ま、一応ね?」

娘だから、というのはただの名田に過ぎない。絶対に。

彼は私を娘としてみていない。道具だ。しかも私たちと考えるような道具ではない。

私たちは自分たちを道具にすることを許してもほかの人間を道具にすることは許されない。

だから政略結婚といつもで結婚しても私たちは相手側を幸せにする義務がある。

たとえ望まない結婚だったとしても。

そのため私たち一族の政略結婚はほぼ禁止だ。政略結婚は非常時の
み。

だから直系の私の結婚はこの歳に見合いなんておかしいと感じたけれども候補を外されたからその償いも入っていると思っていた。

・・・まさかあの女がここまでぐるだとは思わなかつたが。

「あまり頑なにここに仕えないでくださいね。このままだとあなたは壊れますよ」

「あなたには関係ないことです」

「凛香にやつべつで困りますね」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「好きな人と結婚することを望んでいます。これは父親としての願いでありあなたの周りにいる人間がそう思っています。

素直になりなさい。

「自分の幸せを望みなさい」

「・・・これが私の幸せです」

「う、これが私の幸せなのだ。」

「私の幸せはこの一族の幸せ。」

一族の幸せはこの会社が繁栄すること。

だから・・・庄吾を巻き込むわけには行かないのだ。

庄吾には庄吾の幸せがあるのでから。

「・・・相変わらず変なところが頑固ですね。

庄吾君、あなたの決めた道は茨の道ですよ。

行き着く先はお姫様が眠る城か魔獣が住む森か。

あなたの努力しだいですよ

私とわつ 一人のワタシ

ギュッと体を抱きしめる。

一人なんだと分かっていても一人は寂しいと感じてしまうから。

誰も見てくれないことはこの世で一番寂しい」とって、分かっているから。

なんとなく私たちは重なるんだ。

それは長く続く血縁のせいなのか。

はたまた偶然重なったのか。

どちらにしろ私たちは似たもの同士。

もう一人の、ワタシとも言える存在なのだ。

「あら、私より早く当主になつておいてそんな顔してたら私が奪つ
ちゃうわよ」

「ハルちゃんが言つと現実になりそつだから冗談でもやめてよ」

現実になんかならないわよ、言い方があまり気に入らなかつたの眉
がよつていてる。

私より少し長い黒髪にきつい印象を「えそーなー重、でもそれを調
和するようになー整つた顔。そして絶対に忘れられないほど有無を言わ
せないよーうな雰囲氣。

私たちのもうひとつ直系、ヤマトウ株式会社の次期後継者山内遙。

私にとっては境遇が同じよーなお姉さん的存在だ。

ついでに私の友達の先輩もある。

「オメーテトウ、と言いに来たんだけれど面白そーなことになつてい
るわね」

「人の厄介」とを面白そーと言つて首を突つ込まないでくださいね」

「他人事だから面白みが出るのよ」

一言だけ追加するなら私よりも性が悪いといつところか。

これでも丸く収まつている方なんだけれど・・・

「で、庄吾君だっけ？噂の彼。いいの？手放して」

「決めたことですから」

「本人は却下でしょ？しかも告白したみたいね」

パチンと綺麗なウインクする彼女。ビームから情報が漏れた。

「気にしないで。ちよつとしたおじ様からのお話よ」

あいつか…！

「まあ、情報源はい」として

「いや、私にとつてはよくないんですが」

「で？ あんたは恋を捨て勉学に励むの？」

「当たり前です」

「つまんないわね」

「せつしもですかね？ 私に言つ筋合には無いと思こますが」

「ついでまじめぐりいだわ。澪の状況が

「え？」

「この恋の妨げは金持ちというカテゴリーがあるせいたが私のアピールが足りないせいとか単に彼が鈍感なのかつて思つてた。

でも最近はうちの会社の方も妨げになつてゐる。

もつすぐ、あと多く見積もつて3年。3年の間に業績を上げないとうちの会社は…・・・潰れる。

そのぐらい傾いてるの。あの金融ショックのせいで

「それじゃあ・・・」

「一応超特待制度でお金は何とかしてるけれど大学を下手したら中退の危機もあるの。

借錢した、しかも膨大の桁の、元お嬢様なんて一緒に居たく無いでしょ？

彼に見苦しい姿なんて見せる気も無いけど。

だからつらやましいわ。

同じ状況にいられるあなたが

珍しく弱気になっている彼女を見たのは3度目だ。

1度目は彼女の育ての親がなくなつたとき。

2度目は大切なパートナーであり私の友達がなくなつたとき。

それほど彼を大切に思つているのだろう。

私が庄吾を思つのように、彼女もその彼を思つてゐる。

もし逆転した立場だつたら・・・まつすぐ駆けるだらう、彼の元に。

私は・・・私はどうしたい？

立場上決める権利があるのは自分の位置を決められる庄吾と最終決定を下す私。

私は・・・

私と不良ともつ一人のワタシ

「今なんていいました？」

「その意氣地なしに会いに行くから紹介しなさい」

あの・・・根本的なところを聞いても良いでしょうか？

あなた、本当は何しに来たの？

私と似た性格だから分かる。

完全にこの状況を楽しんでいる。そして、口角を上げながら何かをたくらんでいる。

多分書は無いことだと思つ。

そんな人じゃないか。

でも・・・

「これ？噂の意氣地なし

「誰ですか？彼女は」

「彼は庄吾、意氣地なしの弟の和真君。」やはり私の遠縁にあたるヤマトウ株式会社の山内遙さん

「ヤマトウ・・・確かもうひとつ直系って言われてこる?」

「あら? 意外に物知りなのね。

調べれば分かることなんだけれど今ではほとんどの人間が忘れ去れている事実なの」

「敵も味方も調べるのは初歩中の初歩でしちゃう?」

「そうね。もしかしたら私たち氣が合つのかもしれないわね。

もし何かあつたら電話でもビービー。力になるわ

「ありがとうございます」

なんか氣づいたら手を組んでるし。

おーいあと3年で潰れるって宣言してたのは誰ですか?

「で、あなた方が探している意氣地なしは今豊にこき使われていますよ」

「親切にどうもありがとう。よし、行くわよ」

「もう、彼に用なんか無いのに会って行こうとしたじでくだそー」

「楽しそうだからよ

彼女はドンドン進んでしまう。

出来れば今物凄い気まずくなるんだけれど……

「お前が、意氣地なし」

「は？」

「ハル！！」

いきなり現れたのは澪の格好によく似た人。

この人も澪の親戚の人だろうか？

出来れば違つて欲しいんだが……この失礼な人。

「ハル、お久しぶり。元気？」

「どうして早く来てくれなかつたの？」

「『めん、豊。ちょっと急だつたから休みが取れなかつたのよ。

でこいつが例の意氣地なし？

意外に普通ね。もつとひょろひょろしてそうだと思ってたのに

「もう、失礼なことばっかり言わないでください。

庄吾、この人は遠縁の遙さん。多分私たちに一番近い歳の人だよ。
気にしないでね、この人が失礼なことを連発するのはいつものこと
だから」

「聞いてて失礼連発はそつちじやないの？」

実際は遠縁じやなくともうひとつ直系。

分かりやすく言えばもう一人の当主なのに

「まだ当主じやないでしょ、」

「もうなつたもんだわ」

勝ち誇つたような顔で言われても効果はありません。

確かに事実、なつたようなもんだけれど。

でもまだ正式じやない。

次期当主どまりだ。

「えつと、霧崎庄吾です」

「紹介されたとおり山内遙。あんた顔を貸しなさい」

「え？」

「言いたいことがあるの。つづけて。

あ、澪は来ちゃダメよ。

話があるのは彼だけだから」

「えっと……」

「「」めん、話聞いてきてあげて。

あの人こうなった以上誰にも止められないから

「あ、ああ」

そう言って彼女の後ろに立ってく彼。

その姿に少し心が痛んだのは、やっぱり好きだからかもしれない。

「澪おねえちゃん、痛ことこうあるの？」

「うん、なこよ。どうしたの？」

「何かつづけ？」

多分母親のつらい顔を田にしていたからだろう、私の表情を分かつてしまつたみたいだ。

「庄吾がね澪おねえちゃん守るって言つてた。

だから大丈夫だよ。庄吾が守ってくれるよ

「庄吾が・・・」

「うん。 だつて約束してくれたんだもん。

だから僕ね、 いっぱい頑張って大きくなるの

誰かと共に歩むことを拒絶していたのは事実。

父のような人をもしかしたら入り込ませてしまふかもしれないから。

でもようやく母が父との結婚を決めた理由が少し分かった気がする。

共に人生を歩みたかったのだろう。

好きだから、 好きになってしまったから。

この人の傍にいたいと切に願つてしまつたから。

「やうだね」

私も駆けてみようか。

一人の人間として共に歩みたいと、 一緒にいたいと願つてみようか。

それがたとえ困難な道だったとしても、 今なら越えてゆけそうな気がするから。

不良ともう一人のワタシ

「あの、どこまで行くんですか？」

「あの子のお気に入りの場所」

ドンドン人の家なのに自分の家のように進んでいくもう一人の当主についていくと小さな一角が見えてきた。

それは唯一廊下につながつていらない離れに隠れていた場所。

一面の花壇。

「すっげー、花」

「そして、澪の母親が一番好んだ場所」

「え？」

「ここ、当主以外は入れない場なのよ」

「なら俺、ここ」

「当主と一緒に入れば問題ないのよ。ここで桐恵さんにプロポーズしたりとか、凛香さんがおじ様に追求したりとか」

「こちらな」と使われてこなんですね」

綺麗な場所に似合わずドロドロとしてこの・・・

「やうね。わい、わいつと本題に入りましょつか。

私、だらだらするの嫌いな」

そうだった。何か聞きたくてこいつれでいらっしゃれたんだった。

「澪のこと、どう思つてる?」

鋭い視線に臆してしまつやうにならぬが一歩とどまる。

「好きです。恋愛感情の意味で」

「本当ははけ違えてない?」

親に見向きもされない生活、外に出れば喧嘩を売つてくる不良どもしか寄つてこない。

そんな中転機を変えてくれたのは澪との婚約。澪ことのことですが変わった。

友も出来てすれ違いの起きていた弟とも中が戻り始めている。

実際本当はやう思つてるんでしょ?」

「それは・・・やうですけど」

「尊敬や感謝する気持ちが混じり合っているだけで本当は恋愛感情じゃないんじゃない？」

「さういふとくけれどもこんな気持ちで付き合つたって壊れるだけよ」

「ここに来て俺はようやく分かつたんだと理解」

彼女は・・・俺を澪から手を引かせようとしている。いや当然の行為なんだうけれど。

でも彼女の言葉に一理ある。

澪のおかげで今の俺があると言つても過言ではない。

自分のことだけではなく俺のことを考へてくれた彼女に尊敬も感謝もしている。

でも・・・それだけで守りたいとかそばに居たいとか思うのだからうか？

もし泣いていたり、苦しみで泣くとか愛とかの分類じゃなかつたり添つてこない、やつ想ひのは澪だけなんだ。

「たとえ・・・遥さんが言つており恋とか愛とかの分類じゃなかつたとしても俺が一番守りたいものは澪なんです」

俺は澪の笑顔を守りたい。ただそれだけなんだ。

俺の言葉に少し沈黙を置いて笑い出した遥さん。

そんなに大笑いされると恥ずかしいのですが・・・

「そんな歯が浮いたような言葉人前でいえるわね。

私も同じ言葉を言われたけれど意味が全然違ったからそいつ思つよつ
なところも無かつたけれど・・・

いつも堂々と言われると聞いてるしつちが恥ずかしいわね」

歯が浮いたって・・・

本当のこと言つただけなのに。

「あ～～。いいわ。ええ、あなたに賭けましょ～。

「ここにある葉牡丹の花言葉ぞうりになつてくれると信じて。

ひとつだけ、ひとつだけ、親等内でも結婚出来る方法があるのよ」

「え？」

「例外とかそういう特殊な例とではなく全面的に許される方法。

ただかなりの条件が付くけれど」

「あのそれって能力とかですか？」

「まったく。3点を気をつけて過いせば全く問題なし」

「本当にそれって大丈夫なんですか？」

心配する俺をよそに自信満々で言つ。

「当たり前よ。それを証明するために私が呼ばれたんだもの。

ただしこちらの要求としては澪が自分から庄吾自身が好きだと言わせること。

それが完了しだい行つてあげる。ただその分覚悟が必要だけれどね」
ワインクする彼女の雰囲気とは似合わないノリが少し沈んでいた心
を浮上させた。

多分澪が俺を好きになってくれたとき、一筋の光がさすんだらつ。

「葉牡丹の花言葉は祝福や愛を包む。

利益や慈愛と言つた言葉もあるけれど今はその言葉どうりになつて
欲しいわね。

二人の幸せに祝福を祈るわ

たとえどんなことが待ち構えていても。

不良ともう一人のワタシ（後書き）

葉牡丹の花言葉『http://www.hanakotoba.name/archives/2005/09/post-362.htm』から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4627n/>

不良と私

2011年10月1日12時20分発行